

平成26年（西暦2014年）12月

瞑想録（その3）

滝沢 無縛（たきざわ むばく）

本論は私の日々の瞑想の結果をまとめたものです。その瞑想の主題は、東洋思想に基づく「連続体と蓋然論理」です。究極的には科学と対をなすと思っているものですが、科学周辺に位置するものの、科学そのものではありません。学問でもありません、再現性も絶対真も保証しないことを「売り」としているからです。また、瞑想であるという特性上、根拠をこれ以上提示できない言明も含まれています。特に主題以外の部分には、現行の常識では「誤り」とされていることやタブーとされていることも含まれていますが、あくまでも主題を見て下さい。その上で言明を信じるか信じないか、それは読者一人一人に委ねられています。なお、「真理は深いほど簡潔であるべきだ」という立場からは、この論集における何十頁ものだらだら書きは、残念ながら私がまだ真理の核心に到達していないことを、如実に表しています。なお、この論集の基礎となる先立つ瞑想録については、下記のサイトを参照してください。

<http://www.geocities.co.jp/bimromav13/>

1、3次元プリンター

もう半年ほど前になるが、とある博覧会で初めて3D（三次元）プリンターなるものを初めて見た。その時の私と説明員とのやりとりを以下に記す。予備知識のないものに触れたときの人間の反応の仕方や思考様式が結構如実に表れていると思うので、その例に供するのが目的である。

Q: ほう、これが3Dプリンターですか。従来のプリンターとはずいぶん違いますね。

A: 3Dは絵を描くと言うより物造りですから、むしろ「名前が似ているだけの別物」と考えた方が良いでしょう。

Q: 具体的にはどうやってこのプラモみたいなものを作るのですか？

A: 薄く積層して積み上げていく形です。よく見るとほら、横縞が見えるでしょう。

Q: ああ、そうですね。これは地道な作業だ。2Dと違って時間がかかるでしょう。

A: そうですね、半日とかかかるのですが、まだ試作機の段階なので、良く「ジャムる」のですよ。

Q: ほう、「ジャムる」とどういう感じになるのですか？

A: もう無茶苦茶に四方八方に飛び散っちゃって、見る影もないですね。

瞑想録（その3）

Q: と言うことは、一度ジャムってしまったら、途中から再スタートすると言うのはあり得なくて、また最初からやり直すしかない？

A: そうなのですね。結構根気がいる地道な仕事です。

Q: 「夜にしかけて一晩寝て起きれば朝には出来上がっている」と言うほど、簡単で調子の良いものではない？

A: そうなのですね。結構厄介です。ましてや仕事に締め切りがあると大変焦ります。

Q: こちらの積層はプラスチック、そしてあちらの積層は紙ですけど、これらの違いは素材とコンピューターの交換で対応する感じですか？

A: いえいえ、素材ごとに機械本体からして違います。

Q: ほう、と言うことは、医学でも手術の練習等に使われていると聞きますが、内臓はプラモより柔らかいですから、あれはまた機械からして違うと言うことですか？

A: そう言うことになります。

Q: ところでこのプラモの「そっくり再現モデル」ですけど、事前に本物をセンサーとかで計測してそれをそのまま再現する、言わばマスター・スレーブみたいな形ですか？

A: いえいえ、そう言うアナログ的な作り方はしません。全部数値データで保存されています。

Q: ほう、全部数値データですか。この複雑な形や丸みを帯びた物を数値データで持っていると言うことは、そのデータはかなり膨大な物になるのでしょうか。

A: そうですね。メガバイトから時にはギガバイトになることすらあります。

Q: それは大変だ。およそ人力で打ちこめる感じではないですね。

A: 無理でしょう。さっきの医学の場合ですと、CTスキャンやMRIでの計測データをそのままストックします。家屋のプラモのような幾何学的な場合には、四隅等のデータを入れて機械で展開させます。

Q: なるほど、良く分かりました。

どうだろうか。対象が人工の工作機械だから、内容的にはどうしても情理より論理に偏るが、全体として質問者が過去に獲得してある近隣分野の描像を基に、新しい対象に多方面から肉薄して、自分なりの全体観を得ようとしている様が、結構良く表現されているのではないだろうか。

ただ、全体としてとくに注目すべき点は、内容が技術に関わるもので、形式上は論理進行に係るものが多いにもかかわらず、実の会話の進行はほとんど意味論に依存していて、形式論理で済んでいるところはほとんどないと言う点だ。つまり世の中の実論理は論理学と異なり、形式推論のみで済むところはほとんどないということだ。

瞑想録（その3）

これは現行のIT技術が日進月歩であるものの、人（はおろか犬や熊の）頭脳の働きをおよそ代替できず、あくまでも「役に立つ助手（手足）」の域を出ていないことを意味する。言い換えれば論理学のみで解明できる世界は極めて限られている。

良く使われる言葉に①ほう、②と言うことは、の2個が見える。「ほう」は意外な情報であつたがそれなりに理解できたことを表現する感嘆詞だが、ここでの理解は形式的理解ではなく意味的理解なので、IT技術等で到達できる世界ではない。でも、そうかと言って単純に「アナログ」の一言で片づける訳にはいかないほどの、色々な際立った特徴が見える。

また、「と言うことは」は、相手の説明をなるほどと理解した上で、その理解した地平に立つと新たに見えてくる素朴な疑問についてピンポイントしている状況に対応している。全体として極めて論理的な縛りをしつつも、単なる形式理解では進めないような切り込み方をしていると思う。そしてこの切り込みの鋭さ、的確さが、即ち地アタマの良さとなるのであろう。

本日は意味論を含む推論について全体を概観した。後日にもっと深掘りして報告したい。

2、街道は面白い

作家の司馬遼太郎さんは、街道の魅力について良く語った。そして自ら率先して街道を歩いた。彼にとって街道はなぜここまで魅力的だったのであろうか。

街道あるいは道、これは水墨画等では、木造の家や小船や橋とともに、人工物でありながらあたかも自然と一体化した、言わば「自然物待遇」として描かれる。それにも拘らず街道はあくまでも人工物である。その証拠に街道は、①比較的平坦なところを選んで造られる（技術的制約）、②用のあるところ例えば交易等の必要に応じて作られる（経済的制約）、等の制約がある。決して地球や世界を公平無私かつ全体的に偏りなく観察できる道具ではない。

高い山を縦横無尽に道ができるということもないし、無人の田舎にことさらに道ができるということもない。この状態のもっと端的なのが鉄路である。私は良く電車に乗ってウォーキングに行くが、そう言う形で見ることのできる名所はあくまでも駅周辺に限られている。例えば伊香保温泉や御嶽山の山頂がどんなに素晴らしкаろうが、ウォーキングルートにはなりにくい。

瞑想録（その3）

この意味では三浦雄一郎さんとかがやっている山スキーとか、かつて行者がした峰駈とかの方が、ことさらに道のない所を勝手に行き回るのだから、遥かに世界を満遍なく俯瞰していると言える。

さて、冒頭の問いの答えは、司馬さんが単なる作家でなくて歴史作家であったと言う点にある。歴史の観点からは街道は、その街道ができた由来は別として既存の街道を利用すると言う立場からは、交易や軍の移動等の生々しい現場であって、山や町を見るよりも遥かに歴史が息づいているのだ。司馬さんは決して地球を平等に見たかったのではない。むしろ彼個人の特定の観点から見たかったのだ。

特定の観点と言うと直ちに連想するのがイデオロギーである。では誰よりも日本人の心を持った司馬さんが実はイデオロギー主義者だったということなのか。ここで注意すべきは、イデオロギーは西洋だけでなく東洋にもあったという点だ。例えば陰陽五行説だが、方角、季節、人生、医学、出来事その他あらゆる事象の基本となっている見地、一種の統一理論であるが、しかしこれも一種のイデオロギーである。西洋のイデオロギーと異なる点はこれが終点でなく起点であったことだが、それにしても便利の代わりに限定の不自由もあった。

この限定の不自由の故に、東洋では例えば医学で、現場の権化である手術と言う技法が進歩しなかった。それ以前にそもそも、東洋では科学技術が欧米のように発展しなかった。では、欧米ではイデオロギーが終点になる筈のところ、なぜ特定の理念に捕らわれない科学技術や医学が進歩できたのか。それは欧米人が、もちろんイデオロギーのような形式論理が彼らになじむものの、それ以上に実利優先の現実的な性格があったからだ。この実利優先はもしかすると彼らの精神的祖先であるユダヤ人から取り入れた物かもしれない。

キリスト教の束縛の中にあった欧米は、宗教改革によって新教（プロテスタント）を成立させたが、これがそれまでの聖人信仰や教皇無謬説等全てを廃棄するその勢いで宗教性すらも廃棄したために、新教は聖書信仰に代表されるような精神性皆無の、ほとんど道徳レベルの低い「教え」になり下がり、イデオロギー性が薄まった。そこで「直接観察」と言うイデオロギーなしの、言わば「無手順」と言う手順しかない現場主義に、「当たり前だからこそ役に立つ」と言う御利益があることに気付いた欧米人たちが、自由精神で科学技術を発達させたと言う訳だ。そして新教もことさらに異端審問しなかった。まあ、所詮はただ見るだけだから、再現性も当然にあるし、気付きも全くの単細胞ができるものであるが。

直接観察、この基本は目で見ることだが、もした目で直接見るだけだったら大した成果は得られなかっただろう。ところがここに便利な発明・発見があった。望遠鏡と顕微鏡だ。いずれも幾何光学の産物であるが、見える範囲と対象が格段に広がった。続いて発見・発明されたのが電磁場で、見える対象と工作手段が更に格段と広がった。そのおかげで現在の科学技術と言う壮大な体系があるのだが、それにもかかわらず科学技術の拡大可視化手段は無数にあるように見えて、実際にはほとんどが、光子か電子かの2つのみである。

つまり、「科学がすごい」と言っても現実には依然として多分にワンパターンの単細胞なのだ。あたかも欧米人が牛乳を基に、やれチーズだ、バターだ、クリームだ、ヨーグルトだ、しかもチーズ一つとっても数百種類もあるぞと言っているのと同じである。同じ開発努力を牛乳以外の原料探しに費やしたなら、食生活は現状よりはるかに多彩になっただろうに、狭い所にはまりこんで気付かずにいる。結局は西洋も現代も、イデオロギーと現物主義の、相互作用のない単純和なのだ。

そんな現代だからこそ今こそ多様性を求めて、我々は欧米キリスト教の世界標準からいったん離れて、目を東洋思想に向けるべきではないか。現物主義の利点は認めるが、良いものは現物主義だけではない。司馬さんが敢えて街道に注目することにより、日本人特有の自然と一体化して悟りを得る広い心構えも援用して、今まで気づかなかった精神的な美しさや立体的な智的構造に至れたように、今こそ我々は漫然とした物理的な現物主義から、特定の美や悟りと言う精神社会への回帰を目指すと、計り知れない人生の多様さや豊かさが得られるものと確信する。司馬さんの観察眼の素晴らしさは、あたかも乳製品のようにブツだけ見えても、見えてこない。

3、革命はビジネスだ

革命とは本来、「天命が革まる(あらたまる)」と言う意味で、最初に使ったのは紀元前11世紀の中国、周の武王である。彼は殷(いん)の暴君を誅するときに、「これは反逆ではなく天命である」と宣言してこれを行った。このように初期の革命は人道への情熱によって起きていた。ちなみにこの時の武王の軍師が太公望である。

歴史上その後もしばしば革命は起きた。近世だとフランス革命とかロシア革命とかが有名だ。ロシア革命はマルクス・レーニン主義を指導原理として発生したが、マルクスは「革命に必要なのはプロパガンダと扇動だ」と言った。またレーニンは、「革命に必要なのは1人の指導者と数人の強盗で十分だ」と言った。現実的ではあるものの、彼

瞑想録（その3）

らにとって革命はもはや正義感に基づいたものではなく、むしろ事を荒立てた上で野望を遂げる、言ってみれば現金で起業家的なイベントと言う側面が強烈になっている。

20年ほど前に起きたペルーの日本大使館占拠事件、これも言わば革命未遂事件であるが、このときの闘士たちは自分たちの行為を「ビジネス」と呼んでいた。実際これらの兵士たちは首謀者に高給で雇われていたのであって、さほど理念に共鳴していた訳ではなかった。首謀者達は麻薬の栽培を資金源に失業中の若者を雇ったのである。また、彼らに「国家を樹立しよう」などと言う大それた野望や理想などはなく、単に自己の既得権益の保持拡張を目指したものであった。

そして最近話題のイスラム国、これも広い意味での革命であろうが、その手口はまるで指導者がMBA（経営学修士）であるかのようにビジネスライクになっている。彼らの目標は「イスラム原理主義に基づいた真正イスラム国の樹立」と極端だが、その具体的手順は、「先ず製油所を押さえて資金源を確保しその金で兵士を高給で多数雇用して更なる勢力拡大を図る」という経済行為の好循環である。

更にリクルーティングにおいては、SNSやネット動画等のITツールを駆使するとともに、組織への忠誠心の醸成も洗脳技術で効率的に実施する。この革命は、目標が金儲けそのものでないだけで、やり方は新進起業家のそれそのもので、しかもその急成長ぶりは本物の起業家さえもうらやむほどである。しかもITツールによる世界宣伝で集めた、国境を遥かに超えた世界中のシンパがこれを物心両面で支える形となっている。その意味でこの革命はもはやローカルな出来事ではないのだ。現に先日も日本の秋葉原で戦闘員募集のビラを配っていた。

このイスラム国の理想と手段の使い分け、本来は矛盾する理想と現実あるいは表の顔と裏の顔を矛盾が見えないように巧妙に使い分ける様は、最近のカルトにも共通して良く見られる手口である。オーム真理教も、終末思想を唱えながら同時に科学技術の発展を奨励していた。そしてその原動力は洗脳と献金や資金集めと信徒のこき使いである。構造は驚くほど似ている。どちらも独立国家を目指すほど徹底していると言う共通点もある。

ただしイスラム国が本気で国家樹立を目指すならば、単に形としての力での国家樹立だけでなく、世界の主要国の承認と言う裏からの手まわし、老獪な政治力も必要なのはなのだが、この手の努力は全くしていない。かえって無残な首切りを誇示して、世界からの孤立を目指している。つまりヘゲモニーは確立して、自分たちの宗教的共同

瞑想録（その3）

体（実際は多分に現世利益的共同体だが）を安全な場に置いた上で力によってこれを維持拡大する気はあっても、実はその時点で十分であって本気での国家樹立は真面目に考えていないと判断される。

イスラム国は現在のアラビア諸国の、異民族であるトルコ帝国からの独立というアラブの悲願の達成も現在の国割りも、「異教徒のキリスト教国主導のサイクス・ピコ協定の妥協の産物であって不潔なので潰してしまえ」と位置付けている。そのために同胞のスニ派アラブ諸国からも敵視されていて、無意味に敵を増やしており、明らかに戦略上は下策である。

ところで、やはりアラブ圏の革命であったアルカイダとかタリバンを見ると、彼らは必ずしも国家樹立を目指してはおらず、目的はあくまでも自己主張と既得権益の確保であって、そのために豊富な資金と献身的な戦闘員それに最新鋭の武器を保有していた。この様子から見えてくるのは、共同体が自己の権利と存続を主張するのに、近代的な道具立てとビジネスマインドさえあれば、必ずしも国家と言う外的体裁は、実は不要になりつつあるのではないかと言うことだ。

振り返れば日本でも、例えば一向一揆では一時的に一定地域を実質支配したが、それでも現存国家にとって代わろうと言う意思はなかった。自分たちの教団の存続と利権さえ保証されれば満足だったのである。それならばよりたやすく実現できて現実的だ。

側面的には、特にIT技術の発達により、情報が越境することが極めてたやすくなり、そのために思想信条の共鳴や説得の手段と範囲が大幅に広がり、それと裏腹に国家の区別がどんどん希薄化しているという事実がある。あたかも、将来は国に代わって思想信条的共同体が、地域に依らずにネット上の結びつきで、人の営みと権利の主体となるかに見える。そして近い将来にこの傾向が徹底されたころには、今は喫緊の領土問題や資源問題も自然消滅していることだろう。

かつて日系人のフランシス・フクヤマは、ソ連の崩壊後の世界政治について、「大国間の冷戦の時代は終わって、今後はあるとしても宗教に起因した小競り合いのみだ」と言った。この予言の核心は、フクヤマ本人も気づいていないかもしれないが、国家概念の崩壊ではないか。

この意味でイスラム国はかたくなに国家樹立、つまり人民と政府と領土の3点セットを執拗に求めつつも、結果的にはむしろ図らずも「国家概念の希薄化」と言う思想上の

革命の生みの親になる、あるいは「ネット共同体世界の出発点になる」そんな予感が、私にはしている。

4、名古屋大学の底力（そこから）

日本人研究者3人が今年のノーベル物理学賞を取った。対象となった研究は、青色発光ダイオードの開発である。そしてこの3人のうち2人までが名古屋大学出身者であった。これで今までの日本人ノーベル賞受賞者の文理合わせて22人のうち、6人までが名古屋大学関係者となり、名古屋大学が一躍注目されることとなった。

ちなみに6人とは、野依良治、小林誠、益川敏英、下村脩、そして今度の赤崎勇、天野浩の各氏である。一体どうして他大学でなく名古屋大学なのか。巷の意見を総合すると、①帝大系では後発の分進取の気概が残っていた、②首都東京でも古都京都でもなく中都市であるため特定の色に染まっていなかった、等が挙げられている。だが私は今一説得力を感じなかった。

私がこれらの研究者と研究を見て感じるのは、全体として湯川秀樹のようなひらめきの発見と言うよりも、苔の一念的な成果が多いことだ。まあ、小林・益川のクオークの世代に関する理論はひらめきと発表する勇気が要っただろうが、野依の不斉反応、下村の蛍光たんぱく質、いずれも発想自体にことさらなひらめきは要らず、むしろそれを実現させるまでの気の遠くなるような根気が必須な研究である。ちなみに彼らの受賞を事前に予測した人は世界中に誰も居なかった。

今回の受賞となった研究も、発想としてはさほど突飛ではない。まず発光ダイオードが電気を食わないだろうことは、そのPN接合の原理から予測できる。熱損失がない分寿命も長いだろう。また、既に赤色と黄色の発光ダイオードができていたのだから、青色がそろえば「三原色がそろって理論上どの色も出せる」と言うニーズも世界中が知っていた。

更に、これまでの色がガリウムヒ素でうまく行っていたのだから、これより波長の短い、つまりエネルギー差の大きい順位を作ろうと思えば、周期表の似た系列のより軽い原子、つまりガリウム燐とかガリウム窒素とか、アルミニウムヒ素とかが良いだろうことはこれも容易に想到できる。実用のネックとなっていたのは発光効率の向上と大量生産技術と言った、改良・工業サイドだった。

瞑想録（その3）

第一に候補の無機結晶はなかなかくっつかない。結合させても乖離しやすいのだ。第二に発光効率が恐ろしく低くてちっとも上がらない。第三に、基本的にCVD（化学蒸着）と言う方法で積層していくのだが、なかなか大量生産に至らなかった。これらの改良点を今回の3人が解決して、その結果今は我々の周りに製品がいくらでも、もしかしたら100円ショップにすら売っているかもしれないほどに普及したのだ。そして彼らが日々努力したこと、それはむしろ純粋研究と言うよりは物造りと試行錯誤、例えばパーツを集めてラジオを手作りするのが趣味な人が、色々工夫して音質を飛躍的に改善するような種類の仕事なのだ。

一般の人々にとって研究とは、ほんの一握りの天才がたぐいまれなひらめきで常識を覆してやるものだと思われがちなのだが、現実には研究のほとんどがこのような、ひらめきよりも忍耐がよっぽど必要な種類の地味な作業なのだ。実際今回の赤崎、天野両氏も、しきりに「忍耐」と言う言葉を口にしている。

さらにもう一人の中村氏、この人に至ってはお世辞にも一流とは言えない徳島大学のそれも理学部ではなく工学部卒で、子供のころから趣味は物作り、性格はやんちゃで落ち着きがなく、大人になってからの言動もかつて所属した会社を訴えたり、「日本の司法は腐っている」などと言い捨てて米国に移住したり、自分の研究が自由にならないなどと言う当たり前のことに怒っていたりと、およそ清貧とか人徳とかとは無縁の人である。こういう、「勉強は今一だが現場の物造りが得意」なタイプは、大学は違うが利根川進氏や小柴昌俊氏も該当する。

対極の東大はと言えば、私自身は東大を出てはいないが、かつてご縁で東大生の卒論や博士論文の指導をしたことがある。そんな経験を通して見えてきた東大生の気質とは、「頭が良すぎて地道な努力が苦手だ」と言うことだ。テーマを与えると、「それはこれとこれをこういう順序でやればできる（はずだ）」とすぐに理解・指摘し、その指摘も全く正しいのだが、「じゃあその通りにやってくれ」と指示してもちっとも動かない。さも「できると分かっているのに何でわざわざ手間暇をかけてやらないといかんだ？」と言いたげなのだ。会社にも東大卒は居たが、その良い頭をひたすら、手を抜いて仕事をさぼることに使っていた。

こういう種類の人たちに「一生をかけてCVDをやれ」と指示しても、およそ無理だろう。つまり研究と言うものそのほとんどが、中の上くらいの地アタマの、余り先が見通せなくてその代わり「どすこい」の努力ができる人に適した仕事であって、その結果が名古屋大学と言うアウトプットとなったのである。会社や社会を見回しても、一番大手を振って肩で風を切って歩いているのは、早慶からMARCHレベルの、言わば中の上の

人々で、天才的な人は地を出さずに遠慮しているか、あるいは左翼知識人（人権派弁護士等）として、はみ出て生きている。

加えて最近のノーベル賞は、単に成果やひらめきの意外性だけでなく、その業績が人々の暮らしをどれだけ向上したかの方に重点を置いて選定している。要するに「ノーベル賞は頭の良さの尺度では全然ない」、この事実を人々は早く認識すべきだ。

5、北大生と中村センセー

先日、26歳の北大生が、物騒なイスラム国に戦闘員として渡航しようとして逮捕された事件があった。取り調べに依ると、この北大生は就職活動等人生全てがうまく行かずに、「日本は嫌いだ、とにかく外国に行って人を殺して死のうと思った」と自供している。つまりイスラム教の狂信的信者ではなく、今の日本や世の中がまとめて嫌になって、「いっそとんでもないことをしてから死にたい」と自暴自棄になっていたらしい。

たしかに日本は、変に横並びで体裁ばかり気にする割に、一度「外れた」人には無関心でなかなか歯車を戻せないところがあるから、この学生の「日本人も人生も大嫌いだ」という気持ちは分からないでもない。もし40年前に生まれていたら、彼は赤軍派に入っていたことだろう。

ところで最近、やはり「日本なんかもう懲り懲りだ」と言って日本人を辞めた人が脚光を浴びている。青色LEDでノーベル賞を取った中村修二センセーだ。「自分の研究が自分の自由にならないふざけた国」「横並びと年功序列ばかり」「日本（の司法）は腐っている」等の捨て台詞で、既に米国籍を取得している。そこまで言うなら自分の実験道具を買う金を集めるところから自分でやりなさいと言いたいところだが（スティーブ・ジョブズ氏は自分でやった）、今日の主題はそこにはない。

この2人、赤軍派の闘士もそうだが、「日本なんかこりごりだ」で驚くほど共通している。現状では北大生はどん底、中村センセーは絶頂と真逆であるが、どうしても場にはまれない、良い意味での妥協ができない、岩窟なほどに自我が固い等の性格はそっくりである。あたかも、ちょっと弾みが違えば、北大生の方は若い起業家として成功していて、中村センセーの方は尼崎でホームレスをやっていたとしても不思議ではない。今の結果はたまたまの歯車のちょっとした回り具合でそのように表出ただけのものだ。2人が今入れ替わっていても何の不思議もないし、ここには運の良し悪し以外の何物もない。

瞑想録（その3）

この2人は特に極端な例であるが、どの人でも人生とは多分にこのような物ではないか。赤貧の中から成功した日高屋チェーンの神田正社長のような人も居れば、同じ赤貧でもこれに負けて殺人の上死刑になった永山則夫のような人もいる。もっとはるかに無名でも、株が当たって大儲けしたおじいさんも居れば、濡れ衣で首になって放浪している若者も居るのだ。もちろん細かく見れば、「愛すべき人物だった」とか、「癖があり過ぎてサポートのしようがなかった」とか、本人に帰すべき理由は多々あろうが、現実には本人の努力では抗いがたい成り行き、「たまたま」の方がはるかに決定的なのだ。もっと端的に、今あなたがそこにいるのだって、今の伴侶と知り合ったのだって、ほとんどたまたまの偶然だろう。

この「たまたま」、これが意外と難しいもので、実は「だから人生は楽しい」とも言えるのだ。明日やこの先が全て見えていてほぼ決まっていたなら、人生はつまらないだろう。多くの人が、転がり落ちるリスクを認識しながらも、それでも形式論理学のような硬直した世の中よりも、「明日はどっちだ」のような変化に富んだ人生を好んで選択している。行き詰った末での窮余の策が、少し経ってみると実は返って成功の近道だったと言うことも、ままあることだ。

例えば予備校大手の代々木ゼミナール、少子化と大学全入時代で予備校事業には未来はないが、たまたまターミナル接近の立地だったのが幸いして、ホテル業に衣替えして生き延びる道を今は取りつつある。サッポロビールだって、これも多分に偶然の成り行きだが、今やビール会社と言うよりビルディング会社である。流行りが終わって倒産寸前だった「札幌ラーメンの道産子」チェーンも、たまたま豚肉を使っていなかったために、イスラム圏に活路を見出して息を吹き返していると言う。

2千年前にも似たようなことがあった。イエスさんの後継者を僭称した使徒パウロは、教えを広めるのに、ユダヤ民族はユダヤ教に固まっていたもう入り込む余地がなかったもので、当時は高々ニッチビジネスとしか思えなかった、異邦人伝道と言う奇策に出た。そしてそのためには割礼と言う儀式が邪魔だったので、これも廃止した。ところがアッと驚くタメゴロー、曇天返しの大化けで、あろうことかキリスト教は異邦人の地で返って想像を絶して興隆し、世界宗教と呼ばれるまでに成り上がった。

そして冒頭に挙げた北大生並みに偏屈で極端で融通もない使徒パウロも、本来なら忘れられるかせいぜい異端者扱いだったのに、今や「さすがはパウロ様」とまで言われるようになってしまった。彼に何らかの功や先見の明があったとはおよそ思えないが、今では世界に誇る大偉人、ノーベル賞すらはるかに超えるほどの勢いだ。教えの内容は実はかなり改変されたが、今やそんなことを気にする人は誰も居ない。

私自身はキリスト教も使徒パウロも大嫌いだが、この想像を絶する、知恵が愚かにされるほどの大逆転劇、これは今の経営者も、そして自由主義社会では人全員が自分の経営者であるという意味では自分自身の日々の選択にも、大いに見習うところがある事象である。パウロのような偏屈な女嫌いにも見習うところがあるのなら、ましてや我々の周りに生起する全ての出来ごとに、一見下らなくかつ冷たく見えたとしても、実は学べることは多いのではないか。

そしてこういう「学ぶ」あるいは「自分の参考にする」と言う心構えで居ると、つまらない世の中も面白く見えてくるものだ。中村センセーはともかくとして、自暴自棄の北大生に惜しくも足りなくて彼が袋小路に陥ったのは、こういう「何でも見てやろう」的な好奇心が足りなかったからではないかと思える。彼のような人物たちに前向きの好奇心があれば、事物も好循環したであろうに。

6、街道はつまらない

先日の記事（記事2）が「街道は面白い」で、今日の記事は「街道はつまらない」。ほとんど人をバカにしたような組み合わせですが、私にはどっちも真です。

さて、街道はなぜつまらないか、一言で言うと、他人によって設定された自由度しかなくて、不自由極まりないからです。私は不当な拘束が嫌いで、自由をこよなく愛する人間です。自由とは選択肢が多いことでもあります。

人は誰でも多くの物を希求しています。基本的人権や生存権、端的に言えば衣食住、これらは当然として、人の魂が希求する最大の物、それは自由だと思います。少なくとも私はそうです。ですから小さいころから、好きでもない友達と付き合う不自由、面白くもない人工的な勉強を強制される不自由、常識や世間体と称して縛られる下らない不自由、まことしやかに「世話になった」形を作られてしまう罨、給料と入れ替わりに時間をドブに捨てる不自由、論理を文字通り受け取る愚かの不自由、こう言ったもの全てをひたすらに嫌悪してきました。

私はウォーキングが趣味ですが、最初はガイドウォーク、つまり詳しいリーダーに案内されてのウォークでした。ガイドウォークには主要なスポットを効率良く回れる利点はありませんでしたが、決められた時間に決められた場所に集合して、リーダーの指示通りに団体行動を取る必要があります。それがだんだん重荷になって、今では一人で自由勝手に単独歩行しています。思えば若いころから私は道から外れるのが好きでし

瞑想録（その3）

た。わき道に入る、裏庭に回る、あるいは当てもなく勝手に歩き回る、こういう無計画な酔歩、これはガイドウォークに比べて効率は悪いです。大抵平凡で面白いことにはめったに当たりません。しばしば袋小路に入ったりもします。でも希に意外な発見がある。この意外さ、想定外の出来事、これが醍醐味で、効率を捨てても自由であることの果報です。

実は私は若いころから絶望が多くありました。私の周辺の選択肢が、ことごとく他人や体制によって勝手に設定されていて、自分を無理に曲げて骨折や打ち身をしながらその既成の形に合わせると言う「自由」、つまり自由と言う名の不自由しか許されていない既成社会に、やり場のない絶望を感じていました。無関係な人や物に八つ当たりしたこともあります。その「子羊でござい」みたいな従順で疑問を抱かない人や物が、あたかも体制の手先あるいはふざけたチンピラに見えたからでしょう。

で、これまでの人生で他人を沢山見てきて、大抵の人々は自分ほど自由を希求していないことが分かってきました。世の中の大半の人々は、目の前の与えられた仕事や環境が何であれ順応するような、言わば去勢された犬のような人々であることが分かってきました。そしてこれらの人々より多少は自我がある人でも、せいぜいが「少しでも楽をして生きよう」とか「少しでも偉くなって威張ろう」と言った程度でした。ですから私の心の叫びは、世の中の平均から見れば、至極不可解な、何をもがいているのか理解不能な事象だったことでしょう。映画「エデンの東」でジェームズ・ディーンが演じた役柄に似ているかもしれません。

そしてこの10年の瞑想を経て、私の感じた不条理の根本が、欧米式一神教式キリスト教式の様式と常識、つまり個人と言う点を構成要素とする絶対不変の論理であることに気付くに至りました。言わば根っこをつかめた訳です。それから後は、点でない、「連続体と蓋然論理」についての瞑想と展開にひたすら務めてきた、こういう順序になっています。連続体と蓋然論理は私の魂の休み所でありました。しかも前例がないので自由に瞑想(妄想)できる、これも私の性分に合っていました。ガイドウォークでない自由な酔歩と言う訳です。これは高等遊民にのみ許されています。冒頭で記した、「命題もその否定もともに真」、これは蓋然論理に特徴的な現象の一つです。街道に関するこの一対の記事も、「肯定も否定もともに真」なる現象をつまびらかにするための材料と言う位置づけで書いています。

最近話題の映画に「蝸ノ記」(ひぐらしのき)と言う映画があります。不始末を仕出かして「10年後に切腹」を申しつけられた侍の生きざまを描いた物語です。「10年後に切腹」、こんな裁定が現実にあったとはおよそ思えません。だがひとたびこの非現実的

な設定をするならば、目の前がパーっと開けて自由になり、この世の事実や科学に縛られることなく、自由に話を作ることができる訳です。魂の飛躍です。つまり、芸術で良くある意表を突く設定は、単に話題作りのためだけではなくて、創造性を保証する貴重な出発点です。そして作品の評価は、それが真か偽かでなく、面白いかな否かで決まることになります。

私は、ここまで荒唐無稽に自由な境地、これが大好きです。連続体や蓋然論理がやがては人々に「受けるか否か」、これは分かりません。でも私にとって、別に受けなくても、自分が面白ければ十分に満足です。今後もこの路線で、私はやっと回ってきた自分の「青春」を謳歌したいと思っています。蝸ノ記の例でも示したように、どれだけ奇想天外かが、どれだけ面白い妄想に浸れるかの、勝負の分かれ目です。

司馬遼太郎先生は既成の街道を基に新しい境地を開きました。山中伸弥先生も既成の科学的手続きを基に IPS という新しい境地を開きました。こういう境地の開き方もあるでしょう。でも私はこれらの先生とは違っていますし、たとえ理解されなくても私の納得できる土俵で今後も生きていきたいと考えています。納得できるとは、端的に言えばホラを吹けると言うことです。

そしてどうせホラを吹くなら、大きいホラの方が、遥かに気持ちが良いです。私に今まで天命が見つからなかったのは、今の世の中が余りに堅物に出来ていて、ホラを吹けるような分野や業界がなかったからだと思います。そして現にないなら、そう言う分野を自分で作るしか道はありません。偏屈な私にはそういう、「既成の街道でない新しい道」の方がよっぽど感動的なのです。

7、脳波の伝播

人は普段、主として言葉を介して意思疎通を図っている。もちろん言葉以外の、動作とか態度とか雰囲気とかによる意思疎通もあるのだが、主力は言葉だ。ところがこの言葉と言うもの、そもそも連続無限自由度の人の心やそれを囲む世の中すべての状況を、高々有限個の言葉と論理で表現しようと言うものだから、極めて隔靴搔痒のもどかしさを感じる。

例えば人の顔や特定の場所を表現しようとしてちっとも伝わらないもどかしさは、誰もが経験していることだろう。夢もなかなか言葉で説明出来ない。だからもし、人が脳波による直接の伝達ができたらどんなに直接的かと思う。あたかも我々現人類でも普通に保有する、良く視線を感じるとか、デジャブの経験とかをあたかも氷山の一角として、

瞑想録（その3）

ほとんどが直感により生で分かり合えるのだ。だが現状のホモサピエンスにはこの能力がない。まだ進化の途上にあるのだ。

今はあまり見かけなくなったが、30年くらい前にはキリスト教の一派であるものみの塔の信徒伝道者達がずいぶんと目立っていた。分担しては効率良く未信徒を家庭訪問して回り、極めて論理的な説明と言葉の手品によるこけおどしで信徒をネズミ算的に増やし、「この調子で行けばあと数年後にはほとんど全国民がエホバか」と思われたほどである。ちなみに効率的な伝道と信徒のこき使い、これはそもそもキリスト教のお家芸なのだが、このころにはあらゆるカルトが採用していた。

そしてある日、我が家にも伝道者がやってきた。そしてずいぶんと熱心なので数回ほど話を聞いてやったことがある。伝道はマニュアル化されていて、あたかも進学予備校の模擬授業を受けているかのようなようだった。そして私は「進歩が速い」などとおだてられながら、納得したふりをしていた。だが私が一番気になったのは彼らのマニュアル的行動そのものもさることながら、「思い込んだらまっしぐら」的な、たとえば頭が悪い割に思い込みが激しく極端に走りがちな、彼らに共通した頭脳構造だった。

そこであるときその人の生い立ちを聞いてみた。その人は早くステップを進ませて私を信徒にして、「一丁上がり」にして自分のノルマ果たしとした上で、さっさと次の人に行きたいようだったが、おそらく「からめ手からも固めるのも早道」と思ったのか、一応語ってくれた。

それによるとこの人は学生時代には赤軍派の闘士だったと言う。つまりマルクス主義の信奉者だった訳だ。そして闘士になった理由は、先輩から勧誘された際にその論理整然さに感動したからだと言う。だがその後学生運動が低調になってしまいやることもなくなった時に、今度はエホバの勧誘を受け、やはりその論理整然さに感動して、一種の「宗旨替え」をして今に至っていると教えてくれた。私はその時エホバと言うものの、あるいはこの手のカルトに共通の脳内構造を見た気がした。

その後も数回、うちに教化にやってきたが、言っていることの非現実さ加減、表面論理におぼれて現実を上滑りする加減に嫌気がさして、「あなたは地球を四角いと言っていますが本当は丸いのですよ」等々嫌味を込めて反論してやったら、向こうも「この人は脈がない」と判断したのだろう、ある日ぱったり来なくなり、それ以来2度と来なくなった。徹底的に効率重視の教団ではある。

瞑想録（その3）

そしてこの人とこの集団を振り返ってみた時に、何か初対面と言うよりは「昔あった人」だと言う感を強く感じて、「その人はだれだったかな」とつらつら考えたところ、その「昔あった人」とは使徒パウロであった。私はパウロに直接会ったことはないが、新約聖書には詳述されている。性格破綻者で極端に走りやすく、勝手に思いこんではひとり相撲に明け暮れ、頼まないのに勝手におせっかいで「正しい自分」を押し付けてくる、そう言う種類の人種だ。今のキリスト教が人工的なのも、イデオロギー至上主義なのも、ことさらに潔癖で女嫌いなのも、イエスさん本来の性格では全くなく、全て使徒パウロの性格である。

そして先日まで目の前でエホバを熱心に教導していたあの伝道者とその仲間たち、彼らがまるっきりそのパウロの生き写しなのだ。しかもその人がエホバに入る前の学生運動家の時から既にパウロだった。そしてその似具合は、まるでその人たちが、何回か輪廻転生した後の使徒パウロその人ではないかと思わせるほど、判で押したようにそっくりだった。言い換えれば、2千年前のパウロの脳波が、その人にそのまま伝播し共鳴していたのだ。

私はこの事実には驚愕した。脳波の直接伝播など、あたかも発振器と共鳴器のように、その場に同時に居合わせないとできない、少なくとも発振器が発振した電波が残っていないと伝わらないと思いついていたところ、2千年前の、およそ残っているはずがない脳波が、エーテルと言う現実の媒体を通せないのに、なぜか直接伝播しているという事実には驚愕したのだ。その詳しいメカニズムは今でも分からないが、さも亡霊に取りつかれたかのようにそっくりの伝播なのだ。

特異な才能を持ったわずかの人に於いてであるが脳波の伝播、私はこの非科学的現象の存在を信じている。交霊術や透視等によって行方不明者を見出すとか事件を解決できる霊能者は、テレビ等でもたまに特集される。そしてその紹介される全員がそうでなくても、またテレビが言うほど百発百中でないとしても、そう言う能力、つまり脳による波動の伝播共鳴は確実にあると信じている。だがこのあたかも集団乗り移りみたいなこの伝播は一体何だ。しかもパウロと言う典型的に暗愚な脳波の伝播だ。聖書と言う所詮は書き物でしかないものにそのような伝播力があるとは思えない。私は聖書信仰と言う形式を全く信じていない。

幸いなことにパウロの脳波は私には伝播してこなかった。私は超常現象を信じてはいないが、私自身がその器でないことは自分が良く知っている。それにこの業界も中には精神を狂わすような危ない際物もあるので、私は脳波の伝播はもとより憑依現象や

超常現象全般に、連続体論や蓋然論理に必要な最低限以上の深入りをしないことにしている。

8、キリスト教3大異端

キリスト教のいわゆる正統派が言う「3大異端」とは、統一教会、ものみの塔（エホバ）そしてモルモン教です。もちろんこれ以外にも異端は数限りなくあります。これら3つのどこが異端かその「非常識な目立つ点」を簡単に言いますと、①統一教会は血縁のまるでない人たちが家族を構成することを強制される、②ものみの塔は何でも理屈で解釈しようとして輸血禁止とか変な神学を押し付ける、③モルモン教は復活のイエスがアメリカ大陸で活躍したなどと唱える上に一夫多妻である、等です。

これら異端は、こういう行いを、聖書とは別のテキストや言行録を聖典化した上で行っていますので、いわゆる正統派は、「彼らには混ぜ物がある」と言う理由で異端宣告し、人々には「不自然な教えで人格を破壊する危険なカルトだ」と分かりやすく説明しています。なおマイナーなキリスト教異端にはいわゆるセックス教団が山ほど結構あります。

正統派の異端派に関する主張、これらは一応その通りなのですが、これらの「不自然」を一つ一つ見て行きましょう。まず「血縁でない赤の他人が兄弟親子」、これって「普通の」教会でも信徒同志は「〇〇兄」「××姉」と呼ばせているじゃないですか。これだって普通の日本人なら違和感を持ちますよね。そして統一教会はこれをちょっと徹底させただけです。次に「何でも理屈」、これって、普通の教会の組織神学だってそうじゃないですか。特に「聖書信仰」派では、その信仰的背骨である組織神学は、ひたすら聖書の離れた部分同士を理屈でくっつける作業です。最後にアメリカでの復活、復活したのは霊のイエスですから場所に縛られなくても良いはずですよ。復活そのものを認めないなら別ですが。つまり一言で言うと、これらの異端の「変な要素」はいずれも、そもそもキリスト教に有った要素を、単にちょっとだけ徹底したものであって、全然でっち上げではないのです。

では異端の信徒の現実的な反社会的行為をどう見たら良いでしょう。統一教会では信徒がある日、本当の家族や地縁から蒸発します。ものみの塔では伝道ノルマで家族が疲弊します。モルモン教では禁止が多くかつ相互監視があります。では「普通の」キリスト教ではどうでしょうか。先祖伝来の宗教を捨てさせないでしょうか。禁止づくめで信徒の魂を抜かないでしょうか。土日の朝から晩まで奉仕と称して縛りつけないで

しょうか。結局は異端派の反社会的傾向も突然の発明やでっち上げではなくて、そもそもキリスト教にあった要素をちょっと徹底しただけなのです。

セックス教団、「愛の家族」とかですが、こういうものが発生するのも、キリスト教を作った使徒パウロの女嫌いと言う個人的性格が教理に勝手に刷り込まれ、特に神父は結婚できませんが、こういった不自然な強制への反動として生じたものです。なお、イエスさん自身はセックスを否定するような言動はしていません。

ここではっきりさせておきますと、私はこれらの異端派を正当化しなくて以上の主張を展開してきたものではありません。そうではなくて、さも「私たちは違います」みたいな顔をしているいわゆる「正統派」の牧師たちが、実はどれだけ正気で人間性があるのか、どれだけ異端よりましなのかを疑問視している訳です。

プロテスタントが主流の米国では、歴史的には本来のキリスト教であったカトリックも、異端の一つに数えられています。また、イスラム教もキリスト教の異端の1つと見ることもできるでしょう。これらは単に既に歴史と勢力があるために既成事実化しているだけです。あるいは歴史を言うなら、キリスト教だってユダヤ教のパウロ的異端です。つまりキリスト教の連中がさも「地獄に堕ちろ」みたいに大騒ぎする「異端」も、実際は多分にこのような相対的な物であって、異端か否かは、その集団が「変にイデオロギー化して一般常識に照らしてどれだけ不自然になっているか」で、予断なしに決めるべきではないでしょうか。

キリスト教は良く「仏教だって本来は外来宗教だったではないか」と主張します。これはその通りなのですが、仏教は土着に際して日本人の気質や風土に合わせようと努力をしてきました。神道の良い所は取り入れて、自然を愛して過度のイデオロギーは避けました。日本の寺はどこでも、境内に花々が四季咲き乱れています。また、日本で特に興隆した禅も、その悟りとは多分に自然との調和を目指した、アニミズムの香りがするものです。

仏教も宗教ですから、キリスト教よりはるかに少ないとは言え、イデオロギーや極端な部分もあります。日蓮は「念仏も禅も真言もみんな妄想だ」と言いました。また親鸞も自分の教えこそが「真の教え」だと言い「歎異抄」つまり異端を嘆く本を書きました。でも今の日蓮宗や真宗のお寺に行っても他派の悪口に終始することはありません。結局皆、おとなしい所に落ち着いて、日本人になじんでいる訳です。

この観点からキリスト教を見たとき、彼らは日本になじむ努力をしているでしょうか。むしろ「外国のそのまゝを絶対に変えないぞ」と力み返っていないでしょうか。牧師が「南無阿弥陀仏と唱えれば誰でも極楽往生できる」と言うような本当の救いを表明したことがあるでしょうか。むしろ小乗仏教や奈良仏教のように「勉強するほど偉いのだ」「聖書の学びをしましょう」などとおよそ精神性のない態度に終始していないでしょうか。

今の日本のキリスト教はまだまだ全くの「小乗基督教」（ちっぽけな乗り物）です。皮がまるで剥けていません。これで日本に根付こうとか、根付かないのは日本が悪いせいだとか、ましてや「救い」と称して日本を全部変えてやろうとか、笑止千万です。共産党と同じ種類の思い上がった独善です。

日本教徒から見れば今のキリスト教など全部まとめて異端です。その彼らの内輪での違いなど、もうゴミ同然です。もっとも真正の日本人の辞書には「異端」と言う語彙すらありませんが。

9、流れを読み、時を読む

人生にはどんな人にも様々な局面がある。不運な場合は、疲れ切っている時に予期せぬ不意打ちがやってくることだってある。だから人は、少なくとも陥れられたくないのなら、各人の人生の目標の違いを問わず、生きるための最低限度の「知恵と経験と洞察力と覚醒」が必要である。そしてこれらの生きるための知恵は、義務教育や専門教育では教えてくれない。

突然の襲撃に持ちこたえるには普段の余裕と覚醒が大切だが、だからと言って四六時中起きている訳にも行かない。早晩神経症になって返って自滅してしまうだけだ。そしてここに事態の急展開を緩和する方法がある。即ち時の流れを読むことだ。物事の流転には流れがある。この流れをつかめば、当面の事態の推移は蓋然的に把握できる。把握できれば事前に防護策も取れようと言うものだ。

ところがこの「流れ」と言うものは、科学ではない。だから義務教育では教えないし、たとえ科学技術で第一人者になったとしても、だからと言って流れを読む能力が特段涵養されているわけでもない。流れを読む、これは自ら実践で、修業と体験を通じて、全身をセンサーにし、本能をフル回転させて、やっと得るものだ。

瞑想録（その3）

昔は武士道があり、流れを読む能力の体得がその人の生き死にと直結していたから、人々は必然的にこの能力を体得した。また藩校や寺子屋で教える四書五経等の教えも、現在の科学技術教育と異なり、直観と常識を涵養するものであった。科学技術教育は逆に、「常識を疑え」と教えている。これでは精神的に引きちぎられるだけだ。

私自身、単に馬齢を重ねただけで大した人生をしていないが、少なくとも現行教育の精神不涵養に対する不信、危機感を持っていて、才能はまるでないものの、宮本武蔵よろしく自然や世の移ろいを師として、泥にまみれになって自らを鍛錬してきた。その方が例えば数式を解くよりもはるかに重要だと言う確信があったからである。

その結果、上司の姦計による左遷を事前に防いだこともあったし、毒親による親戚を巻き込んでの結婚反対にも逆手を取って乗り越えてきた。無意味な転勤による文化からの隔絶や、長距離通勤による時間の垂れ流しを防ぐために、敢えて主流から抜け出したこともあった。白人による人種差別にも、もちろん天の助けもあったのだが、際どくすりぬけ、かつ奴らの手の内を盗んできたつもりだ。「そもそもそんな目に遭遇する時点で既に負けている」と言われればその通りなのだが、私は自分に特別な才能がないことを、良く自覚している。

さて流れ、早い時もあれば遅い時もある。順な時もあれば逆の時もある。対処しやすい時もあればおよそ万策つきて衝突不可避な時もある。JRの技師長で新幹線を開発した故島秀雄さんは技術開発について、「長足で進んで構わない時と、注意深く一步一步進まなければならない時がある」と言った。人が時の流れを読む技術も同様であろう。ところが島さんは、「どういう時に長足で良くてどういう時に細心であるべきか」について一言も語っていない。およそ言葉で表現できないのであろう。そして時を読む技術も同様である。

時を読む達人になると、今は不思議と思われる選択が、数年後あるいは数十年後になって、なるほどと光って見えるような選択を、見抜いて実践することができる。生々しい例になってしまうが、政治のプロであった小渕恵三元首相は、息子でなく娘を後継者に指名した。当時は後援会の反対もあったと思うが、今となってみれば先見の明があったと言うことになる。ただ、十分な危機管理教育は足りなかったようだが。私も、打った手の全てが良かったなどとは決して言わないが、主な物についてはいずれその意味や価値が理解できると思っている。

さて、今日の話をここで終えてしまえば、あるいは多くの人がどこかで一度くらいは聞いた程度の話かもしれない。また、先日に見出した「自分のブログに特有の流れ」に

十分に位置付けられていないことになる。これはある意味自己矛盾でやり放した。私が今日の記事でここまで「流れを読むこと」の重要性をまとめたのは、それが現行の個人の資質や心構えや努力に依存していて、万人全員が同じ試行錯誤を繰り返すと言う、人類にとって万重の無駄を余儀なくされているところ、これをもっと系統的に伝承できる方法がないかと言う問題意識があるからである。

先に例に挙げた島秀雄さんの例なら、「どういう時に長足で良くてどういう時に細心であるべきか」を言葉でなくてもよいから効率良く伝承できないかと言うことである。そのためには現行見出されている数理学の演算や論理学とは異なった演算推理体系が必要だろう。そしてそのためには蓋然論的立場が出発点だと言うことには既に気付いている。科学からの脱出でもある。そして東洋哲学の出番と言う順番になる。

西洋の覚者イエスさんでさえ「見ないで信じる者は幸いだ」と言った。また、「いつまでもしるしを求める邪悪な時代よ」とも言っている。見ないとは観察にバカ正直にならないということでもある。しるしとは証拠と再現性であり科学技術の金科玉条だ。そしてこれらから離れよと言っている。アニミズムは一見矛盾して見える自然の懷に抱かれることであり、悟りとは中庸であり、かつ矛盾の肯定的な受け入れだ。

矛盾についてはこのブログでもしばしば話題にしてきた。論理学では形式矛盾つまりパラドックスについて語るが、世の中の矛盾のほとんどは意味論的矛盾である。例えば「ゆっくり急げ」「慇懃無礼」「公然の秘密」とかだ。形式には矛盾がなくて言葉に矛盾があるのだが、それ故に返って含蓄が深い。

更に蓋然論理には「肯定も否定も同時に真」と言う性格もある。形式論理では真の否定は偽に決まっている。例えば「赤信号みんなで渡れば怖くない」と「赤信号みんなで渡ればみんな死ぬ」との関係、あるいは「小さな親切小さな幸せ」と「小さな親切大きな迷惑」との関係だ。

こう言った性質を集約して行けば、その先に何か見えるのではないかと、私は期待している。そしてその先に流れを読む能力を効率良く系統的に習得する方法が見出せると期待している。これら全部が私のライフワークだ。

10、歴史は終わったのか

私は半年ほど前に、ソチオリンピックでの浅田真央選手の「活躍」、つまりまさかの失敗にもめげず健闘したことを「あっぱれ」と言う表現でまとめたことがあります（瞑想録

瞑想録（その3）

（その1）の記事16）。これに対して、ハンドルネーム「某現代日本人」と言う人から以下のような反論のコメントを頂きました。公開コメントなので再掲します。

（以下にコメントの主要部を再掲）

そこには最終目標を入賞と参加で十分では違いが出ると思う…

それと…浅田選手の気概と武士道は余り関連性が薄いと思う…

明治維新の効果で武士道が普及したと論じているが…違うと思う…

当時人口 1 割の武士で居られたか？

武士の姿勢が人々の理想像として体現していた社会規範が浸透していたから…「武士は食わなくても高楊枝」の真意を調べなさい。

★参照：驕れる白人と闘うための日本近代史

ドイツ語原書 松原久子 著

訳=田中 敏 文藝春秋

★日露戦争から大東亜戦争までの解釈も少し違うと思う…決して慢心だけでは無い。

一度、「武士道」新渡戸稲造 著を読む事を薦めます…

（コメント再掲は以上）

私はこのコメントに反論する気はありません。この人も自分が思うままを書いたでしょうし、私もこのコメントが間違っているとは思っていません。むしろ賛成に近いのです。ただ、ここで指摘された程度のことは事前に承知していました。知った上で敢えて細部を省略してことさらに主要部のみを骨太に、しかも誤解を覚悟でことさらに理解しやすい近似的表現を用いて図式的に書いてみた訳です。

そういう書き方をした理由は、これがブログなのでコンパクトにまとめたいと言う気持ちもありましたが、むしろ人文科学特有の、「細かい差異をほじくり出しては発見と称して論文化する」と言う悪しき習慣の連鎖に違和感を持っていたので、ここは敢えて統一論的な論調で表現してみたということです。確定論に比べて蓋然論は、物事を孤立した点としてではなく、周囲も含んだ「辺り」で把握するのでアバウトですが、それ故に返って統一的理解の見通しがしやすいと言う利点があります。

科学は大きく、自然科学と人文科学に分けられます。そして同じ科学と言いつつも、自然科学は究極的に統一的理解を目指し、人文科学は逆に差異を強調する傾向にあります。違いこそが醍醐味と言う訳です。そしてその差異が意味と価値がある、あるいは今後の発展の契機となるような建設的な差異なら良いのですが、現実には往々にして単に銜学を自慢するような、更には論文のノルマ本数を果たしたいだけの、下らない「発見」が多いのです。

そして学界は今、「論文数の爆発」と言う深刻な難問を抱えています。膨大すぎてとても保存しきれなくなっているのです。もちろん人文科学系だけでなく自然科学系にも不毛な論文は山ほどあります。ですからここは、人文科学と自然科学は重点の置きどころがむしろ逆なので、お互いの長所を学ぶことにより、不毛な論文を減らせるばかりか、新たな発想によりお互いに良い刺激を受けられるだろうと感じます。

特に人文科学系は、山ほどある違いに目を奪われずに、むしろ類似点や共通点を見出す心構えが望まれて良いのではないのでしょうか。そして保存が大変ならなおさらのこと、重箱の隅をつつくようなつまらない論文よりも、科学でない蓋然論理（勘、コソ、ノーハウ、気付き等）であってももっと役に立つ物を保存すべきではないのでしょうか。

こういう観点から先に引用した某現代日本人さんのコメントを見てみましょう。この人は多くのことを細部まで良く勉強していて、この人なりにこの問題の分野全体に関する相場観を有しています。だからこそ「感じが違う」と言う指摘のオンパレードになっている訳です。しかし「違う」を言い始めれば、究極的にこの世の中に同じものなど1つありません。いくらでも無尽蔵に指摘できます。究極的には今日の私と明日の私だって違うのです。そしてたとえ数百ページの優秀論文であっても、紙面が有限と言うことはどこかで論旨と関係の薄い大半をバッサリ切り捨てているのです。

でもコメントの文面は「感じが違う」の羅列と他人の著書数冊の紹介に終わっています。あたかも「私は本を沢山読んでるので知識の量は負けないぞ」と言わんばかりです。ですが、肝心のこの人のオリジナリティ（独創性）はどこにも見当たりません。まとめのメの言葉もありません。端的に言えばパソコンでも機械的に生成できるようなコメントなのです。私がこのコメントをきっかけに何か新しい気付きに至ることはありませんでした。

私はたまたまこの人のコメントを取り上げましたが、このコメントはあくまでも例またはきっかけに過ぎません。この手のコメントは決して珍しいものではなく、世の中にあまたある不毛な論文の典型例なのです。そして「このような不毛な論文が世の中には多すぎるのでもっと建設的にやろうよ」と言いたくて、私はこの人が問題とした記事を書きましたし、ちょうど適切な反論が入ったので敢えて例として使わせてもらったわけです。

学問もかつてキリスト教の修道士のうちの変人幾人かが興味でやっていたころは、世に注目されることはなかったでしょうが、おおらかでかつ自己満足がありました。ところ

が今は大学や研究所が沢山でき、研究が飯の種として職業として固定し、身分は安定したもののその内容は保身とノルマ果たしの世界に変わってしまいました。どっちが幸か不幸か分かりません。

そして最近の「発見」は、たとえそれがIPSほどの立派なものであったとしても、科学と言う業界の存在と手続きが認知された後の、先人の敷いた路線に乗っていれば早晚出てきそうな、役には立つし金になるかもしれないが逆転の発想や驚きのない、凡庸な物に落ち着いてしまいました。

世界4大文明が発祥し、鉄器の製造や稲作が始まり、ゾロアスター教等世界宗教が生まれ、それに続く孔子、老子、釈迦、ソロモン王、ソクラテスの輝かしい知の時代、これはもう2600年も前に終わっています。つまり人類の歴史の意味ある先駆的な部分は26世紀も前に終わっていて、後はそれに目先をちょっと、あたかも現代の人文科学のように変えて再現するだけの、「見あきた芝居」になっていないでしょうか。もちろん細かい違いを言い始めれば、日々無限個ほど違いは山ほどありますが。

もし本当に歴史が終わっているとしたらとても残念です。今からでも「外道」を提案したいほどです。

11、智のレイヤー

ソクラテスは「人は何のために生きるのか」と自問他問した。一銭の得にもならないことでは彼の右に出る者のないという、哲学の始まりだ。これに対し私は次のように答える、「幸せになるためだ」と。すると「人にとって幸せは何か」と言う更問が来てしまうのだが、私は「自分が満ち足りていればそれが幸せだ」と考えている。

高等遊民を自称する私は、日々の素朴な疑問について探索や瞑想することが至高の喜びなのだが、「勤勉は善だ」などとは全く思っていないので、あくまでも趣味または楽しみとしてやっている。だから再発見でも満足で、第一発見者を主張する気もないので、先行研究の有無とか関連文献調査とか、そう言うつまらない仕事はやらない。そもそも素朴な疑問とはソクラテスの例でも見られるように、大掴かみの全体観が本質な場合がほとんどなので、枝葉末節を気にしていると浮かぶアイデアも浮かんでこないのだ。

その結果私はしばしば、「細部には間違っている点が多い」などと、いわゆる専門家と称する人々に指摘されることがある。その手の専門家に限って、その人にはそれが

瞑想録（その3）

命がけの分野なのであろうが、私の主張の骨子の部分を見ようとせずに、本筋でない枝葉末節の部分に噛みついてくる。まともに相手にしていると自分がその末節の低いレベルに引き込まれてしまうになるので、いちいち答えないで居る。するとその専門家は、「お前の敗北だ、謝罪して撤回しろ」などと勝手に迫ってくる。なおのこと始末が悪い。最近はまだ面倒なので最初に、「私がやっていることは科学でも研究でもありません。中には私の主観のみに基づく、根拠を提示できない事項もあります」と断るようにしている。

ところで私はかつてある会社で職業的研究職をしていたが、会社も組織であるから、開発のフロントに立つ研究職と、それらの結果を集約して製品や収入に結び付ける橋渡しのまとめ役と、研究部門員が大きく分けて2通り居る。そしてどの組織でもそうだろうが、これら2者の関係が大抵良くない。

専門職から見るとまとめ屋は、そもそも専門家になり損ねた落ちこぼれのくせに、あたかも犬が木におしっこをかけるように人脈を誇示して仁義ばかり切って歩くだけの半ヤクザのブローカーで、人のまじめな努力の上前をはねて表面的にさももっともらしく「まとめ上げた」挙句に、あたかも自分の成果であるように経営層に報告し、しかも返す刀で我々の専門家の研究の細かい方向まで、経営層の威を傘に着てさも上司のごとく勝手に指示する、不愉快極まりない奴らに映る。他方我々研究者を彼らまとめ役から見れば、会社の方針に機敏に対応できずに自分の殻に閉じこもる、私の汚い寄生虫に見えるらしい。まあこれも分からないでない。

つまり、以上をまとめると、私は会社では幅の狭い専門職をやり、他方私生活では大ざっぱなまとめ役をやっていた訳だ。と言うことは冒頭での専門家に対する自分の怒りは、実は自分に向かってこぶしを挙げて居たことに当たる。私は自分が会社のヤクザ社員ほどにあこぎだったとは思っていないが、でも依然としてこの件に関しては免責されない。と、この矛盾をつらつら瞑想した結果、この問題の根っこは「知識にはレイヤーがある」と言う認識が欠如していたと言う結論に至った。

ここでレイヤーとは、ネット地図によく見られるのだが、ある場所を知りたい時に、細かい道順を知りたい時もあれば大局的な位置関係を知りたい場合もある、そう言ったエンドユーザーの希望に対応して、縮尺の違う地図を、場所と言う意味では重複していて、いたずらにビット数を増やしてしまうことにはなるが、仕方なく何層も用意することだ。本当は1枚の地図で拡大縮小ができれば地図を作製する方も楽なのだろうが、例えば県単位での展望を見たい時に横丁の路地まで表示されると返って煩わしい。

瞑想録（その3）

このような人の認識上の限界を考えると、結局は何事もレイヤーを何枚も何十枚も多重に用意して、特に上位のレイヤーに至るほど情報を大きいものに絞り込む、取捨選択の作業が欠かせないことになる。そして絞り込みの過程では、その地図の目的に応じて、厳密さは敢えて無視される。同様に、研究とか瞑想と言った作業も、情報の発見や探究に関するものである以上、同様に、「本質は骨太に、細部は適当に」と言うことが言える訳だ。

以上述べたことはあるいは当たり前なのかもしれないが、現状の教育や科学者の基本的精神は、「厳密はすべてに優先する」の一本槍で出来ているために、専門家の「森を見ずに木だけ見る」と言う態度に、世の中を挙げて反論しにくい雰囲気になっていると言う不毛なタブーが、言わば空気として支配している。その結果、親の後を継ぐ政治家や経営者が若いころから帝王学を教授されるような例外的な場合を除いて、大局を見ることができない不幸な人が人工的にまん延して、世の中全体を暗愚にしている。

この問題は根本的に、人の時間と能力には限りがあると言う、人の本性に根差している。だからこそ特に近世において分業が盛んになった訳だ。先ほどより指摘している専門家と大局観の行き違いは、これが瞑想とか論争のうちは大して被害がないのだろうが、医学のように人の生き死に関わる局面では影響は重大だ。今や例えば「心臓外科」のような狭い専門領域を取っても、心臓弁の手術の専門家も居ればバテスタ手術の専門家もいて、とても一人で全部はこなせない。

この過ぎた細分化にいち早く対応したのは、システムの国である米国で、国策で”practitioner”と呼ばれる「かかりつけ医」を養成した。病人はまずかかりつけ医の診察を受け、このかかりつけ医が必要に応じて専門医に振り分けるシステムとなっている。ここで米国が違うところは、このかかりつけ医が、専門医になり損ねた落ちこぼれ医がやるのではなくて、その質や社会的地位の高さも含めて保証していると言う点だ。だからブローカー的な practitioner は居ない。

と言う訳で本日の結論は、日々複雑化していく現代社会に対応するには、従来の厳密教育一本槍ではなく、併せて東洋的な全体観察の習慣と重要性を、更には勘とかコツとか言った全人教育も行うように改変すべきだと言うことだ。こういう「両面教育」が進展すれば、「ブローカーまがいのまとめ役」のようなあこぎな裏稼業的人間も撲滅して正常化することができるだろうと確信している。

12、サイコパス

最近話題の言葉に「サイコパス」(psychopath)がある。「精神病質」と訳される。要するに、生まれつき精神状態が普通でない人々のことだ。Path とは pathology (パトロジー、病理学)とか言うところのパスである。この欠陥が良く指摘されるのは、大量殺人事件や無差別殺人事件、あるいは猟奇的殺人事件の犯人にこの病質の人が多いためだ。日本ではもう40年も前、連続強姦殺人事件で世間を騒がせた大久保清がこれに当てはまると言う。

最近起こった、佐世保の女子高生に依る同級生殺人バラバラ事件、この犯人もサイコパスだと言われている。このようにサイコパスには、常識の欠如、他人への思いやりの欠如、結果の重大さの認識の欠如等々、欠如だらけで、その代わりに何か豊かな訳でもなく、だから精神病質と言う欠如体質であると言われている。

ただややこしいのは、こう言った気質がうまく作用すれば、偉大な仕事もなし得ることが指摘されている点だ。織田信長もサイコパスであったと言われており、現に比叡山の焼き打ちなども行っているが、それだけではなく、常識に取られずに、いち早く鉄砲を導入して長篠の闘いに大勝利したり、足利將軍家を取りつぶしたり、楽市楽座を設けたり、本気で天下を統一しよう等々とした。サイコパスがうまく作用すると社会改革ほどの大事業もなし得るのだ。

先に触れた佐世保の女子高生も、成績はトップクラスで女医志望だったと言う。つまりあと2年も待てば医学生になって、心おきなく合法的に解剖ができ、おそらくは才能を生かして伝説の名医になったことだろう。彼女の場合残念なことに、「あと2年待つ」と言う理性が、病質ゆえにどうしても働かなかった。まことに人生は紙一重なのだ。

他にもロシアのイワン雷帝(И в а н Г р о з н ы й)がサイコパスだったと言われている。彼は単に気まぐれや興味本位で当時の取り巻きをたくさん殺し、時には「町が税を納めなかった」と言う理由で町全部を皆殺しにしたりしているが、結果論とは言え、彼が当時の有力貴族や反抗者をまとめて始末してくれたおかげで、今のロシアが強大な統一国家で居られると言う評価もある。

歴史上の人物を続けると日本でも、源義経を始め一族郎党の手柄を取り上げた上で皆殺しにした源頼朝にもその気がありそうだ。彼は他方で、武士として初めて日本を統一して征夷大將軍となり幕府を開くという偉業を成し遂げている。

ただ一般にサイコパスのイメージは悪い。日本では大久保清の他に、女兒連続殺人の宮崎勤、人肉を食った佐川一政、児童連続殺人事件の酒鬼薔薇聖斗等がこれに該当するとされている。何でもありの米国ではこの種のもっと大物が数限りなく居て、FBIのプロファイリングの主要テーマの1つにもなっているほどだ。

さらに米国以外の海外ではドイツのヒットラー、ソビエトのスターリン等、万人単位の大物殺人者が列挙される。ただこの2人にしても、ヒットラーは初めて高速道路網を作るなど、スターリンは世界大戦下の恐慌をかわして経済成長を守ったなど、悪事の影に隠れがちとは言えそれなりの大胆な偉業がある。これはあたかも、「サイコパスでない健康な人は毒にも薬にもならない、忘れられるつまらない存在でしかなく、世の中は良くも悪くも一握りのサイコパスな人々によって動かされている」と結論できそうなほどだ。

とまとめた所でふと思うのだが、人はサイコパスで「あるかないか」の全くの二分法に収まるほど単純ではないのではないのか。つまり程度の差はあれ、程度の差が結果には大きいのかもしれないが、誰にでもサイコパス的傾向はあるのではないのか。そしてほとんどの人はその病質を理性で抑えられるのだが、抑えられないほどに病質が重い人や、偶然弾けてしまった人が、何らかのコトをやってしまうのではないかとも思える。もしそうなら、偶然性もサイコパス発症の重要な要因になってくる。運の良し悪しだ。

こう書いている私も、自分は絶対に違うと言い切れる自信もなければ、自分は絶対に表面化しないと言う自信もない。そもそも多くの人が自分を同じように感じているので、この病質が関心を集めるのではないのか。最近「画一教育の弊害」が言われていて、これには偉大な発明をした過去の偉人、アインシュタインとかエジソンとかスティーブ・ジョブズとか、あるいは中村修二センサーとかは皆落第生やはみ出し者だったと言うことが論拠になっている。そこで思考実験ではあるが、彼らも一歩歯車が狂っていたらとんでもないことになっていた、あるいは逆に大久保清もとんでもない偉人になっていたのかなどと妄想してしまう。

再び敢えて二分法の暴論に出よう。世の中には大きく分けて2種類の人しかいないのだ。とんでもない人と単に普通の人だ。あなたがどちらを希望するかは自分で決めて下さい。ただし希望通りになるとは保証しませんが。

13、発明と発見

瞑想録（その3）

発明と発見、似た言葉であるがどう違うのか。一言で言えば、既にあるものを見つけるのが発見で、まだないものを作り上げるのが発明だ。だからコロンブスがアメリカ大陸にしたのは発見であり、アマゾンがワンクリックボタンをしたのは発明である。発明は特許の対象になり得るが、発見はならない。ただ、発明と発見のどちらになるのか判定が難しい、中間的な場合もある。例えば微積分は発見なのか発明なのか群論は発明なのか発見なのか。一般に数理科学には中間的な物が多い。

発見は既にあるそのものであるから、その対象の自由度は極めて低い。他方発明は結構色々な工夫を入れられるので、その自由度は高い。例えば IPS 細胞の発見は現物そのものしかありえないが、IPS 細胞の作製・培養方法や、IPS 技術を使った再生器官には色々あり得るだろう。今、発明と発見を、IPS 細胞と言う同じ例を用いて説明したが、このように発明と発見が隣接している、原理を発見してそれを用いて発明をする、あるいは同じ物の別の面である場合は結構多い。

例えばラジオの発明は、ラジオ原理の発見とも言える。つまり「ラジオは作られる前からその可能性が暗に存在し保証されていたからこそ発明できたのだ」というみなし方だ。言い換えれば「発明だって物そのものではないにしろ、その原理と可能性が発明以前から保証されていたからこそできたのであって、行為以前から存在していたという点では発明も同様だ」と言う立場もあることになる。こうなってくると発明と発見の違いが分からなくなってくる。

ところが幸いなことに、「明白に発見でない発明」も世の中にはたくさんあるのだ。例えば使徒パウロは、一応イエスさんの言行をちらっとは参考にしているものの、ほとんど自分の思いつきで「キリスト教」と言う新宗教を発明した。これは発見ではないだろう。イエスさんを参考に宗教を語ろうと思えば、それこそ百万通りの宗教があり得るだろうが、パウロの物はその内の、ほとんどイエスさんを見捨てた種類の一つである。要するにでっち上げだ。日本語でも英語でも、「発明」には「でっち上げ」の意味もある。「適当な理屈を発明するなよ」といった具合だ。

言葉はどれもその意味に一定の広がりを持ち、その性質は典型的に連続体なのだが、今の例で同じ「発明」と言っても、ラジオの発明とキリスト教の発明では、同じ言葉の正反対の端に位置すると言って良い。そしてこのあいまいさが、言葉の便利なところであると同時に、言葉のだましやうい要注意な所でもある。

では発明と発見、どちらがより高い能力を要求するのか。発見の対象は既にあるものだから、極言すれば無くした本を探すようなもので、手間さえ惜しまなければ特別な能

力が無くてもやがて探せると言う考え方もある。ただ、現実はその調子良く行っていない。これは主として人類がまだ進化の途上にあるために、「当たり前なのに気付くにも特別の知恵と能力が必要」なためだ。

しかもこの世の中、「どんな問題も必ず解決策がある」などと言うおめでたいことはありえない。そう言って人のやる気を鼓舞すると言う安っぽい教育ならともかく、今人類が滅亡していないのも、人の努力の賜物とか、人類が祝福されているからとか、そう言うことは一切無くて、今までの危ない局面、天変地異も疫病の大流行も、幸いにして人類を絶滅させるには至らなかっただけである。その内天然痘よりもエボラ熱よりもっと手に負えない疫病が流行るかもしれないし、大隕石が地球に衝突するかもしれないのだ。そして今日までこういうことが無かったのは、僥倖以外の何物でもない。

今まで人類は多くの困難に果敢に対処してきた。これは認める。だが、「どんな時でも果敢に努力すれば何とかなるものだ」、これは余りにおめでたい楽観主義者の軽薄な信仰である。発見できない、発明できないもののほうが、世の中には実は多いのだ、そういうものが単に地味なために目立たないだけである。例えばあらゆる容器、缶も瓶も服も車も家も全部電磁場のような非物質で形成できたら世の中の廃棄物は激減するだろうが、こういう仕組みはまだ見出されていない。そして仮に見出した未来の人類か宇宙人が我々現人類を見れば、「こいつらは何とかさばった愚かしい者たちだ」とあざ笑うことだろう。

身近な例だと無限数列、高校で習う数学だが、「収束するかしないかは判別できてもその極限值は分からない無限数列」がごまんとある。病気だって病原菌に依らない例えば精神疾患などは根本治療の方法が無いし、病原菌が見つかってあらゆる耐性を有しているかもしれない。消去ボタンを押すと途端に活性化するウイルスソフトなんかどうだろう。これらは単に科学が未発達だから治療できないのではなく、その多くは原理的に解が不在なのだ。そして特に注意して欲しいのだが、有能な科学者や技術者とは、未知の問題に果敢に立ち向かうドンキホーテではなくて、ある程度の努力で発見発明できそうなネタを目ざとく弁別する能力に優れた者のことである。

世の中は原理的に解が不在で発見も発明も不可能な物に満ちており、我々はたまたま運良く発明や発見ができた物に囲まれて、あたかもそれが全部であるように錯覚しているにすぎない。この真理に至ることは、偉大な悟りでもあり諦観でもある。

14、直観を鍛えよう

以前このブログで、「人は論理では判断していない」と書いた。では人は何によって判断しているのか。思うに人は直観によって判断・決断しているのではない。他人と話をしている、一応の理屈はあっても、「話がどうも胡散臭い」とか「この人は信用できない」などとピンとくることがある。これはまさに直観である。直観は防衛本能の1つであるから、この手の直観は人を危険やわなから守ってくれる。この手の勘が悪い人はろくな人生を歩めないし、天職にも至れない。

さて、ここで言う「日々の判断や決断」は、常に運命に決定的なものだけとは限らない。現実にはむしろ、「今日はラーメンを食べよう」とか「この番組は面白い」などと言った、ことさらに判断などと呼ぶまでもない何気ないようなものの方が圧倒的に多いのだが、これらだって判断の一種であるし、深層では第一義的に直観で決めている。これほどに直観は、日々の人生の選択や、場合によってはサバイバルに決定的である。

では翻って、論理は不要で無価値なのかと言うと、これが決して全く不要ではない。「今日は雨の予報だから傘を持って行こう」とか「あの人はさっき帰って来たからもう家に居るはずだよ」とか「このソーセージは賞味期限を10日も過ぎてているから食べずに捨てよう」等々、これらは皆日常の論理である。と言うか逆に、論理の全く介入しない直観判断も余り存在しないのだ。論理には構築と普遍の効用がある。この論理推論と言う思考法によって人は複雑な思考ができるのだ。論理が無ければ人の脳は多分犬程度だろう。ただ大切なことは論理をうのみにしないことである。その意味で直感の方が上位にある。

ではどうすれば論理を極限まで適切に利用した上で、うのみにしないで済むのか。第1に重要なのはやはり健全な直観あるいは全体観である。碁や将棋でも名人は新しい定石の開発に熱心であるが、しかしこのような小手先におぼれることなく、常に局面全体を見て、その全体的な見通しの明暗を第一にしている。次いで大事なものは経験である。論理にしても直観にしても、これを磨くにはあれ程度場数、つまり経験が要る。端的な話、碁のルールも知らないしやったことが無い人に大局観もない。健全な論理と言う御主人と、健全な論理と言う僕（しもべ）はともに、経験を通じて研ぎ澄まされるのだ。ただその人の感性により、経験を生かす効率については雲泥の差がある。いずれにしても直観が主人で論理は下僕、この上下関係を、最近の科学教育もあって、勘違いしている人が余りに目立つ。

更にもう一つ言及するならばそれは常識である。常識も元は本能に根ざしているが、注意すべきはしばしばその共同体の集団力学によってゆがめられていることだ。しかもそんなゆがみに限って、その共同体の既得賢者である長老や、愚かで無反省な親

瞑想録（その3）

親戚に依って強制される。だから、科学の言うように常識を常に疑っていては一步も前に進めずにちぎれてしまい、素朴に変だと思える「常識」には留保を付けるとしても、常識も基本的には日々の判断に重要な僕である。

例えば台風来襲の時に、鉄筋コンクリート造りのマンションの住人にも誤って避難勧告が出されたことがあった。こういう時に「普通ありえないよな」と思える論理と経験と常識、及びこれらを統御する直観と、権威や世間体には負けない決断力は極めて重要である。勧告を真に受けて避難と称して外出すれば返って命が危ないのだ。あるいは「親を大事に」と言っても親全員が善人な訳ではない。もし全員が善と主張するならそれはイデオロギーだ。だから搾取する親を直感で見破って、これを遠ざけて疎遠にする決断力、これは周りに何を言われようと決定的に重要である。

直観を健全に養ってくると、話の順当な流れが見えるようになってくる。論理と経験と直観を正しい関係でしかも無意識に使っていると言うことだ。ここまでくればもう人生の達人である。そして人生の達人である方が人生をはるかに楽しく暮らせる。楽しく生きるとはだれにとっても人生の第一目標であり基本的人権であるはずだ。以上に述べた「順天力」、私はこれを「順理」と呼んでいる。人生の最終目標は日々幸せに送ることだが、そのためのコツは一から十まで順理の習得である。

「すみませんちょっとお宅に伺わせて下さい」、電話でこう言うセールスマンに、「こいつを一度家に入れたら、契約書にハンコを押すまで梃子でも帰らなくなるだろう」と直感して絶対家に入れない、あるいは「ちょっと寄って昼飯でも食べて行ったら」と言う誘いに、「これは世話になった形を作られて後々面倒になる」とピンと来て謝絶するようになれば、その人は順理のかんりのマスターだ。

先日、「姑にいじめ続けられた嫁が、姑が意味なく嫁の作ったカレーをドブに捨てたのについに切れて、姑を殴って逮捕された」と言う事件があった。その時嫁は「殺してやる」と叫びつつ殴ったので、殺人未遂容疑の現行犯逮捕になってしまった。こんな結末は、間に居る夫なら十分に予想できたことだろう。この事件は、親と別居の上疎遠になると言う先手を打てなかった夫の、全くの落ち度である。順理をマスターして十手先を読み予防措置を取らなかったが故の不幸の典型だ。

ただ直観には「私は正直だ」の逆パラドックスみたいなのがあって、ずれた直感の中に居る人ほどずれていることに気付かないと言うややこしさがある。この危うさが直観の難しい所だ。結局は順理の詳細が未解明な現在では、多種類の場数とその経験の天の理に照らしての常なる反省で、各人が鍛えていくしかないのだが。

論理でなくこういう順理の構造を調べようと言うのなら、それは形式論理の数理研究と異なり、より複雑ではあるが現実に関係して、調べる価値のあるテーマだと思う。

15、私の陰陽道

私は自他共に認める、東洋思想にとっぷりつかった人間である。東洋思想と一言で言っても実は多種多様であるが、西洋思想との比較で言えることは、アニミズム的多神教で、四季自然の巡行や天の運行に順応しようと言う傾向が強いことである。本日は特にその中でも、中国発祥で日本文化にも多大な影響を与えた陰陽道について、その個人的な体験をいくつか披露したい。

陰陽道と言うと普通連想されるのは、安倍清明とか土御門家とかの、自然の運行や運の行方、更には人の生き死にまでを能動的に制御しようと言う一種の妖術の方かもしれない。が、私にはそういう能力は全くないし、欲しいとも思わない。ここで私が触れたい陰陽(Yin-Yang)とは、八×八＝六十四卦の筮竹占いの理論的基礎である易経(I-CHING)で説かれる、「陰極まれば陽になり、陽極まれば陰になる」という、受け身の運氣の上下動についての個人的体験である。

私は努力家でもなければ起業家精神もないので、若いときの人生の希望は、「働かずに瞑想にふけりたい」であった。残念なことにこの願いは叶わなかった。死にたいほどに会社に行きたくない日もあったが、だからと言って「次の日から急に運氣が変わって会社に行かなくて良くなった」などと言うことも一度も起きなかった。結婚式などと言う、バカにならない金を使ってピエロを演ずることなどこれも死ぬほど嫌だったが、結局やらされた。持ち家を買うのも面倒だったが、結局やらざるを得なかった。つまり私の人生の重要な転機に於いては一々陰陽の法則が働いていないのだ。まあその程度の貧弱な人物だということなのだろう。

ところがもっと小さな局面では何回も、陰陽の運氣の逆転を経験している。「田舎に転勤して文化から疎外されることは無駄で嫌だな」と思っていたら海外勤務の辞令が出たりした。「もう現場や役所の理不尽と関わりたくない」と思っていたら研究職に回された。「長距離通勤で自分の時間を垂れ流したくない」と思っていたら最寄りの職場に配転になった。逆に、働かない割に査定が下がらないのでしめしめと思っていたら、会社全体の業績が悪化して給料が減ったこともあった。隣家が夫婦のみで「静かで結構」と安堵していたら、ある日子供が生まれて大騒ぎになったこともある。

そして今ここに挙げたこれらの例は、実は山とある体験のうちの一部に過ぎない。往々にして個々の例の加算だと、「なんだ、たいしたことないな」と思われるかもしれないが、「実は人生のあらゆる局面でこのような事象が起きていてとても筆舌に尽くしがたいほど大きい」と言えば、多少は実感してもらえらるだろう。あるいはこういう「穏やかな超常現象」なら、憑依現象等の物騒な体験に比べてより理解してもらい易いのではないか。

さて、これらの数多くの体験を俯瞰すると、陰陽が働くには一定の心構えがある。第一に心の底でいつか自然に願った状態になっていること、そして第二に「運気を変えてやるぞ」と力まないことだ。運気を意図的に変えようとするとか運気が変わると勝手に確信すること、あるいはなぜかそう言う状態になっていることは、不謙虚な傲慢と油断に通じ、天の運行に失礼で、また天の運行とずれている証拠でもあって、まず運気は変わらない。素直で素朴な心が好まれるのだ。

特に極め付きは、「万事手を打った、これで勝った」と思った瞬間に想定外の事象が出現して負けが確定し、逆に「万事休すだ、もう打つ手がない」と思った瞬間に返って勝ちに逆転すると言うことがしばしばあると言うことだ。私自身も何回か経験している。だから、必ずと言う訳ではないが、「絶対」と言う言葉は出来るだけ使わない方が良い。そもそもこの流転の世にあって「絶対」などありえないのだ。「絶対」は一神教の犯す間違いの最たるものである。武士道にもあるが、「勝つと思うな、思えば負けだ」である。

このような運気の陰陽的逆転が私のみの特殊な事情ではない証拠に、もちろん易経が古典として今にまで残ると言うこと自体が最大の証拠なのだが、他にも有名作家の小説にこのような逆転がしばしば見られると言うことがある。芥川龍之介の「蜘蛛の糸」では、主人公が「自分は助かった」と思った瞬間に糸が切れる。筒井康隆に「死にかた」と言う作品があって、教室に鬼が乱入して生徒を次々と鉈(なた)で殺していくのだが、主人公が「自分は逃げ延びた」と思った瞬間にその頭に鉈が振り下ろされる。こういう小説が好んで読まれると言うことは、このような形での運気の逆転を、多くの人が何らかの形で体験していると言うことではないか。

こうした運気の逆転は、私の場合人間を謙虚にしてくれたが、逆に人を謙虚にするための虚構として陰陽が設定されている訳ではない。陰陽を逆にとると、「どうせ努力したって陰陽で勝手に上下動するだけさ」と焼け鉢になってしまう。つまり陰陽は、人がどう思おうとあるいは人の行いが良かろうが悪かろうがある意味冷徹に（実は愛によ

って)やってくるものであって、キリスト教の安っぽいプロパガンダのように「労働はあなたを自由にする」と言った類のものではないのだ。

作為と思っているうちは自身の波を天の運行と合わせることができなくて、天の理(ことわり)に反する、徒労で無駄で醜い人生しか待っていない。こう言った低級な人生のうちは、いくら周囲から褒められても、自分の中にある魂(アートマ)が落ち着かないので、謙虚ならすぐに分かる。逆に天の運行の中にあれば、例えば「帰妹」のようなとても悪い卦が出て、腰を低くしていればなんとか乗り越えられる。

陰陽、これは奥が深く、「経験すればするほどますますその運行にすっぽり入るコツが付く」と言う好循環を示す。このような状態に居るのは心地よいので、すぐに分かる。東洋の他の思想家、例えば老子や荘子あるいは孔子でさえも、かれらはことさらに陰陽道を実践した訳ではないが、彼らの人生は鮮やかに陰陽道に従っている。彼らの態度の自然さから伝わってくるのだ。偉大な人物ならではの予定調和である。禪の高僧は「風邪をひくときには風邪をひくが良からう」と言ったが、この悟りのうちにもその奥に陰陽的な影響が感じられる。そしてこううまく天に運ばれて、最後は西行法師のごとくに、遅くも早くもないタイミングで、「春の如月の満月の夜に、花の下で目出度く往生を迎える」、そんな予感がする今日この頃である。

16、マザーテレサは良いのだよ

何年か前にあるプロテスタント系のキリスト教会の信徒たちから、「カトリックは間違っているけれどマザーテレサは良いのだと牧師に教えられた」と言う話を聞いた。ご存知の方も多いと思うが、同じキリスト教会でもカトリックとプロテスタントは犬猿の仲で、互いにののしり合い破門し合っている。また、マザーテレサはインドで難民貧民を多く助け救ってノーベル平和賞を受賞した、カトリックの修道女である。

この話を聞いて私は、その時飲んでいた牛乳を鼻から噴き出しそうになった。「牧師の野郎がまたウソを教えたのか」と呆れたのだが、そのウソが余りにも見え見えの不出来だったので、思わず失笑してしまったのだ。そしてこの信徒たちも、信じたふりをしているだけで非信徒の私に告げ口をしただけなら良いのだが、「牧師先生のお言葉だから当然に正しい」などと本気で信じているのなら、その洗脳の程度は重篤である。

さて、この問題に関連してふと思ったのだが、世の中にはここまで深刻ではないものの、結構似た「信仰告白」が多くあることに気付いた。かつて真面目に、「核武装

はいけないけれどソ連の核は良いのだよ」とのたまう一団があった。学生運動が華やかだったころの「進歩的文化人」のセンセー達のセリフである。もっと身近では「韓国人はけしからんけどヨン様は良いのだよ」と言うのもある。熱狂的な韓流ファンのおばさんたちだ。「イスラムは危ないけどマララさんは良いのだよ」と言うのもありそうだ。

これらの摩訶不思議なセリフに共通なのは、理性とか理屈とかが全く愚かにされていることである。いくら「信仰は理性ではない」とは言え、これでは「何でもあり」になってしまう。行きつくところは牧師をグル(カルトのボス)とする、絶対的人治主義のコミュニティだ。北の金正恩(キムジョンウン)と同じで、第一書記が絶対善であり第一書記の言葉が法律の全てなのだ。

で、ここまでだったらこれはしばしば揶揄される「本気だから余計に笑える」に過ぎないのだが、ふと私は、「実は笑って済ませてはいけないのではないか」と言う気になった。禅の悟りに至る公案も、知恵を愚かにするために作ってあるだけあって、なかなか「ひん曲がって」いる。例えば、仏性(仏の性質)は草木国土悉皆成仏、つまりこの世のあらゆるものに及ぶのだが、他方では「狗子仏性」と言って、犬には仏の性質があるとは言い切れない。また「庭前柏樹子」と言って、広大無辺な仏性が実は1本のビャクシンの木に収まっていると言う。更には「隻手音声」と言って、「拍手の片手の音を聞け」とも言われる。別の公案には、2人の小僧に同じことをやらせておいて、導師が「右の小僧は間違っていて左の小僧は良い」と宣言したと言うのもある。これなど先の「マザーテレサ」にそっくりの構造をしているではないか。

つまり、どうしてもなく愚かな物は、尋常でないのはもちろんだが、ものすごく下らない場合の他に、その逆理ゆえに、ものすごく高い真理に近い場合もあるのだ。もちろん先述の牧師が高い悟りを得ているとは全く思っていないが、だから「マザーテレサ」で誰かがどのような高い真理を得ようともこの牧師に何らの勲もないのだが、カラスの鳴き声で悟りを得た高僧も居るように、知恵で聞くならば愚かな話もしばしば悟りへのハイウェイだったりする。

こう言った観点から敢えて先の「マザーテレサ」を反復してみよう。彼女はノーベル賞受賞のお祝いとしてローマ法王から贈られた金の馬車を売り飛ばして、自分が営んでいる貧民施設の運転資金にした。これを「ローマ法王の権威の否定」と見れば、あるいはプロテスタント主義に通じるかもしれない。しかしこういう合理化は行為を理屈で追認するだけで、つまり牧師のウソを正当化して理性のレベルに持ち上げるだけで、真理の発見の見地からは百害あって一利なしだ。

先に似ていると紹介した、小僧2人の考案、この心は、「良いとか悪いとか言う評価は実はつまらない所にあつて、悟りはこのような二律背反を越えた彼方にある」と言うものだが、そして理屈一辺倒の故に聖書の書き物を字面でしか読めない今の愚かなキリスト教には実は良い薬なのだが、こういうことを聞く耳があるならとつくに聞いていることだろう。

ではこういうのはどうだろう。これら一連の言葉は一言で言うと、人がその本質に於いては理屈より感情が勝ることを端的に表している。他方プロテスタントは、それ自体は信仰でありながらその信条は圧倒的に組織神学と言う理屈に依っている。「理屈のみの信仰」、こんなものでまともな精神が鍛えられる訳がない。キリスト教に於いては、我（エゴ）は取れたり死んだりしているのではなく、単に理性で押し殺されているだけなので、タガが外れるといっぺんに爆発する。つまり本質的に小乗基督教（ちっぽけな乗り物）なのだ。

であるところ、この「マザーテレサ」をマントラのように繰り返しているともしかしたら「喝」と一皮むけて、キリスト教が理屈を脱却し、理屈に依らない、異端の見張りばっかりに明け暮れない、本当の精神修養になって、大乘基督教に進化できるかもしれないとも思えてきた。理屈よりもマザーの行いに、行いよりもマザーの広い慈悲の心を、理屈でなく直接に経験として見習おうと言う訳だ。これは究極に、パウロを通さずに直接イエスの知恵を直接吸収しようと言う態度になる。本来の「イエス教」だ。注意して欲しいのだが、イエス教とキリスト教とは全く違う代物だ。

しかしキリスト教がたとえ大乘に脱皮しようとも、そう言うものは既に日本の禅や神道や修験道が体現しているから、人類智としてはすでに達成されているのではないかと考えられる。それはそうなのだが、現代社会の最低限を保証している民主主義や普通選挙や弁論主義や四民平等や科学技術、これらのシステムはたまたまとは言えキリスト教が育てたものであるから、キリスト教が大乘化すれば、これらのリベラリズムも併せて大乘化してくれると言うメリットが考えられる。それこそが究極の、神仏習合ならぬ「神基習合」であつて、これは人類文明全体を、形式的リベラリズムから精神的リベラリズムに高めてくれる可能性がある。実際「マザーテレサ」の奇貨で、ここまで行って欲しいものです。

17、矛盾の恩恵

瞑想録（その3）

「世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」、古今和歌集に収められた、稀代の歌人である在原業平（ありわらのなりひら）の有名な歌である。現代語に直すと、「この世の中に桜と言うものが全く無かったなら、人々の春の心はさぞかしのどこであっただろうに」となる。と言うことはつまり、業平は心から、「桜が無ければ良い」と願っているのか？

いや、それではあまりに艶消しで、およそ和歌とは言えない。業平は別にのどかで居たい訳ではない。実はこの歌は裏から、「いやあ、春は桜のおかげで本当にうきうきするなあ」と、桜の素晴らしさに感嘆しているのだ。ではなぜこのようにひねくれずに、素直に歌わなかったのか、それは正面から素直に歌っても陳腐過ぎて、とてもこの桜の躍動感を表現できないからだ。「本意は裏にある」、これは一種の巧妙な矛盾である。形式的矛盾ではなく意味的な矛盾だ。

似たような表現はまだある。羽柴秀吉は主君の織田信長に喜んで欲しい余り、戦にほとんど勝ったところで信長に援軍を求めた。最後の「とどめ」は信長に打ってもらおうと言う計らいだ。これを知った信長は秀吉のことを「憎い奴だ」と言った。これも秀吉が本当に憎いのではなく、「憎いほどにあっぱれだ」と言うのが本心の、これまた巧妙な反語表現である。これらの例は、「人の心は本質的に矛盾なので極めつけは矛盾でしか表現できない」と言うことの好例である。「矛盾が公認されているからこそ反語表現があり、そして心からの感動と楽しさがある」と言う順序になっている。ヨガや仏教の「真理は裏からの否定形でしか表現できない」に通じるところがある。いずれにしても根っこにあるのは矛盾だ。

別の矛盾を挙げよう。私はストイックな方なので、会社や集団の規則や統制や社交辞令等の愚かのまん延、そして無意味な付き合いや宴会が大嫌いである。そして、「ストイックな人は貧乏だ」と言う多くの例にもれず私も貧乏なので、スーパーの安売りのインスタント食品や缶詰やレトルト製品に大いに助けられている。だがこれら庶民の味方を製造しているのも会社であり、その会社にも私の嫌った愚かな集団力学が存在するだろう。そしてその集団力学の作用の結果として、これら庶民の味方が考案され生産されている訳だ。と言うことは、私は骨の髄まで嫌いな会社の集団力学の、実はそのおかげで生き延びていると言うことになる。これが矛盾でなくて何であろうか。

恩恵ではないのだが、更に別の矛盾を挙げよう。私は瞑想が趣味で、この一連のブログも瞑想の結果をまとめたものだ。ところがこの瞑想というもの、出方について決して行儀が良い訳でなく、準備のあるなしに関わらず外出先でも真夜中の睡眠中でも勝手にやってくる。そして思いついてすぐにパソコンを開けて書こうとするが、パソコン

を開けて初期稼働しているうちにしばしば失念してしまうのだ。だからと言ってパソコンを常にかけているのも、なぜかそう言う時にはほとんど思いつかないので無駄である。つまり極言すれば、パソコンが開いていても開いて居なくても、理由は別にして瞑想は完結しないのだ。これは「猿のツボの逆理」に似ている。猿のツボにはまった猿は、手を離せば助かるが食べ物は手に入らない。手を離さないと食べ物は猿の手の中にあるが人につかまり殺されるので食べられない。どっちに転んでもダメ、これは人をくじけさせる、ブラックホールのような矛盾である。恩恵ではないが考えさせる。

だが人は利口で、この矛盾の恩恵を逆手にとって、多くの小説や芸術を作り上げてきた。良く使われるのが夢とか鬼で、夢を仮定することによって現実の縛りから解放され、かつ全く未開拓の地平に至れるために、好きなだけ妄想を働かせることができる。妄想は脳の最高の使い方であり、至上の喜びである。例えば小説の中でもより事実に近いSF、この醍醐味も矛盾の活用である。例として小松左京の「日本沈没」を見よう。この小説は、実際は日本海溝付近にあるプレート境界が日本列島直下にあると言う設定、現実との矛盾を利用したファンタジーである。こうずらすことによって、現実の科学の厳密の罫にはめ込まれずにしかし科学的テストを残したままで、自由に妄想ができたと言うことだ。

現代の数学だって、「点だって無限個集めれば幅のある連続体になる」と言う、ある意味苦し紛れの虚構の上に構築されているファンタジーと見ることもできる。この虚構が現代数学に、広大な沃野と、それを耕す辛子種を賜ってくれたおかげで、その沃野を自由に耕して現在の壮大な体系になっているのである。その根っこは「連続体の神秘」であって、先の虚構はその解釈の1つに過ぎないが、運良く巧みな虚構であったために、傑作なSFを書くことができたと言う訳だ。この点の「連続体と蓋然論理」の立場からは、蓋然論理と言う「締め付け過ぎない論理」のおかげで色々なファンタジーを妄想できるのだが、「連続体」の方は、これが既に神秘を内包してしまっているために、どうもこの上に更に虚構を重ねる余地が余り見つからない。むしろ連続体そのものの掘り下げに依ると言う逆方向の方が、生産性がありそうに見えてきた。ただしこの直前の言明はあくまでも直感で、何の根拠もない。

更には先日紹介した「カトリックは間違っているけれどマザーテレサは良いのだよ」の矛盾、これだって多分にけがの功名だが、新しい妄想と瞑想の種をふんだんに与えてくれた。一般にオバカやお笑いにはしばしば、良く考えると「笑って面白がって忘れる」ではもったいないような、妄想と瞑想のネタがたくさん転がっている。一重に矛盾が与えてくれる余白と、矛盾が考えさせるきっかけの恩恵である。

整合があり平滑な論理は、時には同情や助け船のような有りがたい物もあるものの、大抵は大学の図書館と同じで、死んだ物の集まり、壮大な墓場であり、瞑想してもほとんど何も生まない。むしろ矛盾こそが人を生きさせる、生き生きとした魂の飛躍の広大な運動場、少なくともそのきっかけなのだ。ただ、矛盾の多くは自己保身の出まかせだったりカルトの洗脳行為だったりして、こういうものに下手に脳波を合わせると精神が破壊されるので、うっかり取り付かれないように、天の運行にしっかり合わせて峻別しなければならないが、それでも基本的に、整合を捨てて矛盾をこそ求めよう。遥かに生産的で面白い。

18、ミスター牛丼

長く牛丼の吉野家の社長だった安部修仁（あべしゅうじ）さんが、この夏に「65を過ぎたら判断力も即断力も落ちるから」と言って第一線を退いた。42歳で社長になって以来22年の間吉野家を率いてきて、「ミスター牛丼」の異名を取るほどに、日本発のファストフードの代表である牛丼を育てかつ共に生きた、人生がそのまま牛丼発展の歴史みたいな人である。

この人の人生もなかなか変わっている。福岡県に生まれ、高校時代はギター演奏に没頭し、卒業後ミュージシャンになるために上京、その際、ギターで売れるまでの生活資金と活動資金稼ぎに、吉野家にたまたまバイトで入る。「当時一番時給が高かった」と言うのがその理由だった。

その後、「ギターには自信があったが牛丼屋の仕事も面白くなって」吉野家の正社員となった。丁度全国規模に拡大していた時で、各地の相次ぐ出店に尽力した。時あたかも外食産業が伸びてきたころで、吉野家は「安い・早い・旨い」&24時間営業と言う当時としては画期的な商法で長足の発展をしていた。実は私が学生だったのもあたかもこんな時期で、夜更かしの学生のための安くて美味くててんこ盛りの夜食と言えば吉野家だった。あの頃の私は牛で出来ていたと言っても、過言ではない。

30歳前後で既に強大な権限を任され、米国進出ではその先兵として自ら渡米して、「beef bowl」の販売の先頭に立った。ところがその最中に吉野家がまさかの倒産、会社更生法を申請した。店舗網の急激な広げ過ぎが原因だった。最早海外進出どころではなく、安部さんも急ぎ帰国して債務処理に当たる。その後倒産の責任は問われずに再生した吉野家の役員に就任して、堅実な拡張経営に参画、42歳にして社長になる。

社長になってからも、乾燥肉を使用して味が落ちて客足が遠のいたことの後始末や、米国のBSE問題への対応、力を付けてきた同業他社（すき家、松屋、なか卯等）との競争と差別化、更には持ち株会社移行と言う純粋経営問題にも積極的に関わってきた。学歴上は高卒でしかない彼が、米国MBA並みの多方面の活躍をして、そして先日後進に道を譲った。まさに業界全体を引っ張った訳だ。

もし彼が当初の希望通りにギタリストになったらどうだっただろう。おそらく良い腕で有名になり、多様な才能であたかもつんくさんや秋元康さんのように、作曲やプロデュースも手掛けたのではないか。では「ミスター牛丼」になってからも夢が忘れられないで居たのだろうか。米国のフォード元大統領は、国の頂点を極めてもなお、「本当はフットボール選手になりたかった」などと言っていた。これでは世の中に、自分の人生に満足している人など1人も居ないかのようにになってしまう。ただ、安部さんからはそのような声は聞こえてこない。偶然入った道でもそこで満足することはできると背中教えているようだ。現にビジネスで隠れた才能を見事に開花させている。

「ミュージシャンが経営者」と言うはずいぶんと畑違いに聞こえるが、実際そうなのであろうが、そう言う多才な例はない訳ではない。有名企業の例ではソニーの大賀典雄元社長は声楽屋、サミットの田尻一社長も芸術畑出身（演劇専攻）である。いずれも全くの素人から始めて経営の頂点を極めた、多才な人たちだ。また、バイトから始めて頂点を極めたと言う例も、もちろん偉業だが、例えばマクドナルドのチャーリー・ベル元社長とか、ブックオフの橋本真由美元社長（お笑いコンビ「あのねのね」の清水国明の姉）が居る。

さて、解説が長くなったが、なぜ私が安部さんにこんなに関心を抱くかというと、もう結構前だが私も院卒で就活をしたときに、当時学問や研究には飽き飽きしていて、出来るだけ勉強っぽくない所に就職したいと、当時考えたのが、第一に吉野家、第二にマクドナルド、そして第三がすかいら一くだった。同級生は日立製作所とかトヨタ自動車とかだったから、かなり異色だろう。結局は今の会社に先にご縁があって入社し、流れ流れて結局研究職などをやっているが。まあ、もしもっと若くて今新卒就職なら、ゲームソフト会社を狙うだろう。

私は安部さんよりも若いので、仮に吉野家に入っても彼と競争することはなかっただろうが、もし競争しても勝てなかった自信がある。私は安部さんよりも頭が固いし、即断力もないし、人脈づくりも下手だ。粘りもないから倒産、干し肉、BSE等の崖っぷちでくじけていただろう。

もちろん彼の取った決断に全て賛成する訳ではない。BSEの時は吉野家のみ「牛肉も産地が変わると味が変わる」と言って豪州産に変えずに、一時牛肉が途切れた。また競合他社が多メニュー路線に走るのにも、ひたすら単品メニューに拘った。同じ牛丼の価格をいきなり100円も上げ下げしたこともあった。私が社長だったら別の選択をいただろうが、他社にかなり追いつかれたとは言え、いまだに「一味違いが大違い」のあの吉野家の定番の味を守れたのも、安部さんの妥協を許さない頑固さと直観の鋭さならではと思われる。今でももし吉野家と他の牛丼店が並んでいたら、迷いなく吉野家に入る。

「人には人数分だけのドラマがある」と言う。その通りだと思うが、やはりドラマが面白い人とそうでない人が居るのではないか。そして私的には安部さんのドラマが、他人事ならず極めて面白く映るのだ。

19、素朴な疑問

題名は素朴な疑問としたが、本来疑問とは、少なくともその端緒に於いては素朴なものであろう。「そもそも素朴でない疑問」の例を、少なくとも今の私は挙げられない。何気に従来の経験や、経験から得た知見や、あるいは通常感覚と「何かどこか違う」「素直には受け入れられない」と言う引っかかる感覚が、疑問の本質だ。強いて言えば「答えを知っていてわざと聞く」種類の「疑問」があるが、これは多分にディベートの技法であって、本来の意味での疑問ではない。

そして世の中の進歩や発見発明は、往々にして素朴な疑問が端緒になっている。アダム・スミスは「なぜ人にとって必須なほどに重要な空気がタダなのか」という素朴な疑問をきっかけに、近代経済学の基礎を築いた。ニュートンは「なぜリンゴは落ちるのに月が落ちてこないのか」という素朴な疑問をきっかけに、万有引力の法則を発見した。ジェンナーは「なぜ牛の天然痘にかかった人は人の天然痘にかからないのか」という素朴な疑問をきっかけに、種痘法の開発に至った。ソクラテスは「善とは何か」という素朴な疑問をきっかけに、哲学を創始した。他にもトインビー、ウェゲナー、ダーウィン等々、素朴な疑問についての瞑想が、それまでの常識を覆す進歩に至った例は多い。

ただ、これらの素朴な疑問、もちろん「常識やイデオロギーに凝り固まった人には素朴な疑問にすら至れない」という意味で素朴な疑問の生起にも必要な形質はある。だが、今例に挙げた顕著な「素朴な疑問」に至ったのはおそらく彼らだけでもなければ、彼らが初めてでもないだろう。色んな事について常にそうなのだが、多くの人々が、ふと疑問

瞑想録（その3）

に思いながらもそれを瞑想することに価値があると思わず、すぐに忘れてしまう傾向がある。だから大きな分岐はむしろ、素朴な疑問を敢えて深追いするか否かにあるように思われる。

アインシュタインは、当時「何かの間違いだろう」と思う人も多かった、マイケルソン・モーレーの実験に敢えて正面から向かうことにより、光速不変の原理と相対性理論の発見に至っている。だが実は彼以前に、マックスウェルとローレンツが、相対性理論発見の一手手前まで行って惜しくもそこで立ち止まってしまった。彼らは電磁場の支配方程式を大成した人たちで、特に電場と磁場を統一すると言う、今は物理学の基本指針になっている、力の統一の先駆けをしたのだ。この成果で十分に立派なのであるが、彼らはその電磁場がガリレイ変換不変でないことに気付きながら、無理はないとは言え、それ以上進まなかった。もし進んでいたらアインシュタインに先駆けて相対性理論を発見できたであろうに。

もちろん全ての素朴な疑問に深入りする価値があるとも思わないし、そんな人生訓を背負っていたらすぐに疲れて倒れてしまう。だからここにもまた、先日の「矛盾の恩恵」と同様に、天の理に順じて価値ある問題を見抜く直観が重要なのだ。だがこのリスクは、素朴な疑問を瞑想することの価値をいささかも減ずるものではない。手前味噌で恐縮だが、私も一応このような「素朴な疑問の瞑想」を愛する端くれである。そして当ブログのこれまでの記事も、一貫してその結果の集約である。

さて、今日の後半ではそのような素朴な疑問の一つである、「誉められることの危うさ」について言及してみたい。「誉められる危うさ」、これがそもそも逆説的である。誉められて怒る人など居ないだろう。「先生と呼ばれて怒るバカ居ない」と言う訳だ。ただ、誉められるにも色々あって、「見たいテレビを譲って偉いね」と母親に誉められる息子も居れば、「親孝行な息子さんですね」と近隣に誉められる独身の中年男も居る。出世だってノーベル賞だって一種の誉められた。4年前に尖閣諸島の領海を犯した中国人船長は、国家英雄の称号を与えられている。

だがこれらの例を見て、本日の「素朴な疑問」の一例であるが、素朴に何かおかしいと思わないか。瞑想するまでもないのだが、これらの例から見えてくるのは、「偉い＝都合が良い」と言う、誉めの構造に見え隠れする「金の鎖」である。つまり、それは金色に光っているかもしれないが、でも人を縛る鎖であって、結局その人は体制に体よく使われているだけなのだ。大抵使い捨てだが。その人は褒められて喜んだ瞬間に自ら進むべき道を自ら踏み外している。天の運行から外れて落ちてしまっているのだ。だからこれらの教訓は世の常識とは逆に、「誉められたら怪しみなさい」と言うことだ。

多分にそれは落とし穴なのだから。先の「親孝行な独身中年」だって内実は往々にして、飛び出す勇気がない自分をごまかしているだけなのだ。

この例でも分かるように素朴な疑問は大それた発見のためだけにあるのではなく、日々の自分をリスクから守ると言う実益のためでもある。そして心が浮（うわ）ついているとかあるいは特定のイデオロギーにはまってしまうと、精神が蝕まれて素朴な疑問に気付くことすらできなくなってしまう。逆に正しく広い直観を磨くために、人は四季自然と親しんだり、あるいは参禅したりする。あるいはスポーツに打ち込んでも良い。

素朴さ、これは何にも負けない最大の才能だと思う。そして人は誰でも生まれつきこの才能を持っているのであり、現に無い人とは、いつかどこかで無くしたか抑圧している不幸なあるいは意気地（いくじ）の無い人々である。

20、夢見と臨死

近所に「夢見が崎」と呼ばれる小高い丘がある。かつて、城造りの名人の大田道灌（どうかん）が、「この丘の上に城（中世の城につき、砦に近い）を築こうとして夢を見た」と言う言い伝えから名づけられた丘だ。その夢とは、「大きな鷹が襲ってきて彼の兜を持ち去る」と言う夢だった。道灌はこの夢を不吉な予感であるとして、この丘に城を作らずに立ち去った。この丘は高さと言い形状と言い（上の図）場所と言い、私には極めて良い立地条件に見える。道灌も同感だったから一度はこの場所を選んだのだろうが、彼は典型的な中世人として、物理よりも超常的な夢見を優先した訳である。私も、「数字になる物理よりも人の直観の方が正確である」と言う考え方の人間だが、それにしても夢見が崎を見て登るたびに、「彼は惜しいことをした」との感を禁じえなかった。

不吉な怖い夢と言え、誰でもそうだろうが、私だっていくつか見ている。幽霊に憑依された夢とか、絶壁から突き落とされた夢とか、迷路の中に閉じ込められて孤独死する夢とかだ。時には悪魔が解き放ったジャッカルに襲われて食い殺される夢を見てうなされ起きたこともあった。それでもなお道灌の心情は理解できなかった。結局依然として理性が勝っていたのだろう。なお一応言い訳をしておくと、私は楽しい夢の方が多い。

ところが最近、非常に不吉な夢を見た。夢の内容は、「娘を殺された母親が鬼のような形相になって復讐をする」という内容で、なぜか私も標的だった。こうストーリーだけ書くと以前の怖い夢と特段変わらないように見えるかもしれないが、この時は夢の始

瞑想録（その3）

まりからして全然違っていた。話の内容そのものもさることながら、雲行きとか雰囲気とかの環境が先行してどんよりと、「不吉な」「まがまがしい」「おどろおどろしい」と言った舞台装置に満ち満ちていていた。そしてそれのみでも十分に人をぞっとさせ、不安に陥れじっとり冷や汗をかかせる、あたかもおみくじで「大凶」を引いた時のような暗澹たる夢だった。そしてこの時に、先の大田道灌が夢見を優先させた気持ちが分かったような気がした。

ではこの夢が具体的に、私の何の不吉な前兆なのか、まだ分かっていないし、今のところ特に不幸にも見舞われていないが、私がこの夢を見たきっかけにはおそらく、ここ数カ月の間当ブログで、「直観を大事にする」ことを訴え続けてきたことと無縁ではないと思われる。つまりこうした記事を書くうちに自分の直感も研ぎ澄まされて鋭くなり、中世の人々が有するような超常能力が少し出てきたのではないかと思うのだ。だとしたら自分の望んでいた成果なので、不吉な夢とは言え嬉しいことではあるが。

夢見を語ったので、似たような超常現象でもう一つの体験を披露したい。それは臨死体験である。臨死体験は「死んだ人しか語れない」矛盾があるにもかかわらず、多くのことが言われている。良く聞く話が「この世のものとは思えない美しいお花畑が出てきた」とか、「先祖が出てきて戻るように言われた」とかだ。始めに断わっておくが、私の場合はこういう臨死体験まで行っていない。せいぜい「プチプレ臨死」くらいだ。

やはり最近、風邪をひいたのだろう、高熱になって動けないほどにぐったりした時に、それまで宇宙大ほどに広がっていた感覚、言わば自分の領域の神経の行き届くところが、段々狭まって行って、ついには自分の部屋ほどもほとんど把握できないほどに狭まり、かつ遠い記憶は全部、あたかもハードディスクが壊れるかのようにこぼれ落ちてしまった。それにも拘らずもう一人の、そう言った狭まりを客観的に見つめている自分が居て、かつ自分自身もその狭まりに、静かな諦観は感じて少しも不愉快でも不安でもなかった。このまま気持ち良く閉じそうな予感すらした。その後眠りに落ちて再び目覚めた時はもう狭まり感覚はなかったが、その時欠落した記憶は今も復帰していない。

死後の世界について色々言う人が居る。あの世があると言う人も居れば、ないと言う人もいる。高名な物理学者のホーキング博士は、「死とはパソコンがシャットダウンするのと同じだ」と言って、死後の世界を信じていない。東大病院救急救命センターの矢作直樹医師は多くの死と直面した経験から、「あの世は絶対にある」と確信している。死後の世界を信じる人でも、天で教祖と間見えると思っている人も居れば、輪廻を

繰り返すと思っている人も居れば、復活を信じる人もいる。復活を信じる人でも現世の体を重要視する人も居れば、正反対にゴミ扱いの人もいる。

私自身は、死後の魂の肉体からの分離と別の空間への移送を信じている。そこはこの地上のような多次元時空間ではないので、距離とか時間とかは無い。心身二元論と言う訳ではないので体と魂は不可分に結びついているのだが、しかしなぜか魂のみその別の空間に移る。そこでは各人が信じたように、輪廻論者は輪廻で、天帝論者は天帝で、あの世を信じない人にはその信じない様で、かつ互いに矛盾せずに「あの世」があるという描像が私には見える。色々な宗教が違ったことを言うのはいずれもその側面のみを見ているからだ。だから親子が別宗教でも困らず、犬猿の仲だったとしても幼くして亡くなったとしても困らず、ユートピアだからつまらないと言うこともなく、あの世では全員が自然体で存在して、かつ満員になることもない。「イエスさんより先に生まれた人はどうやって福音を聞けるのか」などと言う問題も存在しない。

夢にしても臨死にしても、超常の極まった世界であり、かつマニアックでなくどちらかと言えば健全な超常の代表である。こういう世界で「遊んで」見ると、科学技術で全てが解決できると信じている科学教徒のこの世界が、如何にもちっぽけに映るのだ。

21、ゆとり教育と独裁者

数年前まで「ゆとり教育」と言うのがあった。詰め込み教育の弊害、例えば点数主義とかいじめとかへの反省から、義務教育内容を減らして、その分「余裕を持って生きる」「自分で考えて行動する自主性を養う」等を目的として20年ほど前から始まった教育理念で、積極的推進者は元東大総長の有馬朗人文部大臣であった。

日教組が言いだすならともかく、大学の頂点を極めかつ本人も理系の世界的な核物理学者と言う経歴からは、「ゆとり」はすぐにはつながらない。だが彼にはもう一つ、俳人と言う顔があった。趣味とはいえ玄人はだしの域に達していたのである。これは彼の多才な人柄を象徴しており、またそう言う人だからこそ「能動的に自ら経験して考える」ことの大切さを知っていたのであろう。だがこの「ゆとり」の結果は惨憺たるものだった。

学生の学力は落ち込み、理想に反してぼったくような、やる気も自主性もないような生徒しか育たなかった。大学にそもそも選別しか期待していない企業はもとより、大学の教師も「高校生レベルの補講をしないと誰もついていけない」と嘆くほどになって、

結局今は「反ゆとり」とでも呼ぶべき時代になっている。そして「ゆとり世代」はボンクラの代名詞になった。

ではなぜ「ゆとり」が失敗に終わったのか。理想が間違っていたのだろうか。そうではない。と言うか理想はむしろ正しかった。正しかったが高すぎて、それこそ有馬さんほどの一部の天才しか実行できないようなものだったのだ。だから本気でゆとりをやるのなら、それに応じた諸準備と意識改革の長い地ならしが必要だった。何よりも先兵となるべき現場の先生たちが、どのように指導したら良いのか分からずに右往左往して、結局何もせずの放任になった訳である。今後は反動で、しばらく「ゆとりもどき」は一切タブーだろう。

わたしはこのゆとりの失敗に、「独裁主義者の思いつきの失敗」を重ねてしまう。どういう重ね方かと言うと、彼らの場合も大抵、思いつき自体は全くの誤謬でも荒唐無稽でもなく、ただ準備が足りない場合が多いのだ。それ自体は推奨しないとは言え、いやしくも独裁で権力を握ろうとする者、バカであるとか政治感覚がずれていては、あっという間に寝首を掻かれてしまう。金日成だってサダム・フセインだって、賢いから独裁者になれたのだ。

このような例で顕著なのが、ルーマニアの独裁者だったチャウシェスクだ。彼は「国力の源は人口である」と考えて、国民に多産を奨励した。奨励と言っても共産主義国だから命令である。その結果一時に赤ん坊が山のように誕生した。ところがこれらを養うミルクが足りず、食糧も足りず、ナーサリールームも病院も足りず、その結果伝染病が蔓延したが輸血する血液も足りず、なりふり構わずに輸血したために多くの赤ん坊がエイズで死んでしまい、これに対する国民の不満が彼を失脚させる要因となった。「人口を増やせ」、これは少なくとも一面では正しい。日本だって明治期に富国強兵政策で幾多の国難をくぐりぬけてきた。だが物事はあらゆる事象が連関しているところ、その1つだけ強引かつ性急に持ち上げようとしても、それは原理的に無理な話なのだ。

これほど悲劇的ではないが、ソビエト連邦からロシア共和国に移行した時のゴルバチョフ大統領は、「大統領令」を発布できる強大な権限を確保した。しかも発した大統領令のほとんどはロシア経済の立て直しに必須と言う意味で正しかったにもかかわらず、周辺環境が整っていなかったために「元から無理筋」の命令であり、結局ほとんどが無視された。

このような性急な改革は、民主主義で有能な官僚を抱える日本にだってある。アベノミクスの第3の矢の民活の具体化のために、ケインズ経済学よろしく土木工事を活性化させて資金を注入したが、「どんぶり勘定」と揶揄される公共工事も「ただ掘って建てれば良い」と言った単純なものではなく、例えば筋工のような専門職の限界が隘路になって、竣工数が少ない割に工事費を不当に釣り上げる結果となっていて、諸産業に好循環が波及していない。

理想が高すぎて人民が付いてこなかった例としては、江戸末期に老中にして八代將軍吉宗の孫でもある松平定信が主導で行われた、寛政の改革がある。田沼意次の拡大経済を引き締めるために、節約と勤勉を奨励したが、時すでに遅くまた余りにも過激であったために、「世の中に蚊ほど（このように）煩き物はなし、文武々と（ブンブンと）夜も眠れず」と揶揄されて頓挫した。

理想が高いのは大切なことである。ただ、理想は才気がないと思いつかず、他方で理想を実現するには圧倒的多数の凡庸な人々にその気になってもらわないとできない。これは典型的なパラドックスであり矛盾だ。だが以上歴史で垣間見たように、理想の多くは間違っていたからではなく、「才気 vs. 大衆」の落差と言う自明な事実を無視して性急に走ろうとしたことで倒れた。マルクスが警告したように、この世を決めるのは圧倒的多数の愚民なのである。そしてこの大衆のばかばかしさに気長に我慢ができないなら、その人は仮にどれだけ才気走っていても隠遁するしかない。

22、クソリプとほめ殺し

最近「クソリプ」と言う言葉を聞いた。「クソコメ」は昔からあって、つまらないあるいは嫌味な等、耳障りあるいは不愉快なコメント全般を指したが、クソリプ（くそなリプライ）は少し違う。例で見ると分かりやすい。例えば「今日は飼い犬のポチが芸を覚えたので、特上の肉缶詰を買ってあげました」と言うツイートをつぶやいたとする。するとこれに、フォロワーでもない人が横から、「ブブー、アフリカには今日も食べられない子供たちが何万人も居ます」と返すようなリプライを指す。

一般にクソリプは、①人を不快にさせ白けさせる目的で意図的にリプライしている、②そのリプライをした人は、天然に空気が読めなと言うよりも、言っていること自体は正しくて博愛に満ちているのでことさらに反論できないことを計算に入れた上で不快にしている、と言った特徴がある。しかも不愉快にされたからと言ってクソリプに反論すると、「あなたは愛が足りません、人として最低です、反省しなさい、謝罪を要求します」

などと意図的に逆切れされて、一層不愉快になることが事前に仕組まれている。「嵌められた」状態、蟻地獄に自動的に陥るのだ。

こういう「たくまれて自動的に罠にはめられる」状態には、昔から「ほめ殺し」と言う技術があった。「いやあ、さすがは〇〇さん、偉いですね、あんなすばらしい見解、私はとても思いつきませんでした」などと「評価」して、実はそれ以上の発言を封殺するようなやり方である。本心は単に「だまれ」なのだ。言われた方もこれ以上言い訳をすると「唇が寒い」状態に陥ってしまうので、自然と黙ってしまう、一種の逆手取り、ディベートの技法である。クソリプは特に誉めてはいないが、意図に反してはめられる点では同様である。

ところで先般、「氷水かぶり」(アイスバクツチャレンジ)と言う「善意のリレー」が流行った。米国の若者が考えたゲームで、指名された人は氷水をかぶるかALS(不治の難病)協会に寄付するかの、いずれか一方または双方をして、かつ次の人を指名しなければならないと言う、一種の「伝言ゲーム」である。このゲームの本質は、善意の衣を被った、「不幸の手紙&一気飲みの強制」なのであるが、仮にそう分かってもなかなか断りにくい。現に孫正義さんとかホリエモンとか山中教授とか浜崎あゆみとか、結構な有名人々の多数が、喜んでかどうかは知らないが、これをやった。

他方でビート・タケシとか織田信成さんとか、指名される前に「俺はやらないよ」と宣言した人もいるし、安倍首相のように指名されても無視してやらない人も居た。そして少なくとも日本では、いつしか下火になった。こうして下火になった現断面で振り返ってみると、やらなかった人の方がむしろ隙もなく肝も座っていて立派に見える。そして逆にやった人の方が、より知恵が足りない単なる隙だらけのお人好しに見えてくるから不思議である。私など、「孫さんはビジネスの鬼だけど、こんなことをやるような隙だらけで今後大丈夫か」と、他人事ながら心配になって来たほどだ。愚かな要求にはあくまでも愚かな答えが適切なのだ。なお、断わりにくい物にはほかにも、赤い羽根共同募金がある。やはり善意を食い物にしている。

私はこの氷水かぶり、流行り始めた時から「これは以前感じたのと同じ嫌らしさだ」と直感した。「ほめ殺しシステムになっていてけしからん」と言う以前に、直観として「我々日本人の肌に余りにも合わない不自然さ不潔さ」を感じたのだ。そしてその不潔さとは実に、「基督教の宣教師に以前感じていた不潔さ」そのものであった。口ではもっともらしいきれいごとを言いながら、その実強引に自分の型にはめ込まないと気が済まない不遜さ、善意の押し売り、それが基督教だ。歴史上も基督教の

宣教師が、アジア・アフリカ・中米アメリカを植民地化するための先兵、提灯担ぎだった。鞭を背に隠して飴をちらつかせる奴らである。衣の下に鎧が見える。

一般に米国人はこの手の、一見奇麗事の、実は悪意に満ちた人工的なお遊びをでっち上げるのが得意である。もう彼らのDNAにしみ込んでいるかのようで、彼らはこの手の悪ふざけを、最早ちっとも不自然に感じないどころか称賛すらする。要するに人としての自然な感情がマヒしてしまっているのだ。

似たようなことで昨今私も体験したことだが、例えばある仕事について謙遜して譲ってやったところ、その相手（上司とか親戚）はもうその次の瞬間から、「お前は権利放棄したのだから、全部おれのものであり直ちに言うことを聞け」状態になって、驚いたことがある。ある種はめられた、逆手に取られて裏切られた感じがした。少し前までは謙譲の美德の心に感じて、相手も少しは手加減したものだが、もう最近では日本人の常識が欧米化してしまったのかと愕然とした。ちなみに権利義務にうるさい欧米人は、こういう露骨な態度は機転と発想の柔軟さ、つまり有能の証とすらされている。

こうしてグローバル化や世界標準化の波によって、日本人も徐々に生来の勘を失って、ついには「ばれなければ、適当な理屈さえついて居れば何でもありだよ」のマインドになって行って、それが昨今のクソコメやクソリプの陰険さに現象として現れているとしたら、これはもう単なるいたずらを通り越して、大和民族の危機である。ほめ殺しどころか、ほめてもないでただ殺すのみだ。クソリプの巧妙さもこれらに似ていないだろうか。「見え透いていても手が打てないことを逆手にとって、無垢な相手を自分の蟻地獄に誘い込み、食い物にして随喜に至る」、もう完全に大和魂を無くしている。

では氷水の教訓に照らして、やはり善意を悪用しているクソリプの矛盾にはどう対処したら良いだろうか。結局は「関わらずに無視すること」が最上のものである。つまりその相手は実は構って欲しくて茶々を入れているのだから、無視されれば実は悔しいのだ。そして悔しいだろうがもう打つ手はない。この事実を各自が理解して、下手に説教を囁ませずに皆で無視する。結局はこの大人の態度に尽きるように思う。大和心とは、大人の心でもあるのだ。

23、思念とビッグデータ

経済学とは数字に関する学問だから、他のどんな分野よりも計算機による数値解析になじむように見える。実際、金融工学と言う分野もあるし、保険のアクチュアリーは

瞑想録（その3）

数学系の人になるし、新規の金融商品の開発にも理数系の人はずいぶんと入って来ている。典型的な近代経済学である。

こういう今の常識に鑑みると、マルクス経済学の存在は一種異様である。しかも戦後の反動期の学生運動華やかだったころは、大学で経済学と言えはマル経を指していた時期もあった。だからこういう学部を卒業して銀行等の実業界に入った人々は、会社でOJTにより、「役に立つ経済学」を別途勉強したものだが、その勉強にマル経の学習が役立ったかと言うと、それが全く無かった。要するに同じ「経済学」と称しながら、互いに全くの無関係な分野なのである。

マルクス経済学はその名に反して思想である。学問と言うよりは思念の産物なのだ。まあ大元のマルクス主義が主義と言うより信仰だから、それも納得できるが。あたかも大川隆法の、「科学」と称する瞑想に近い。まあマルクスは当時の経済状況を、数字ではないものの肌で感じていたから、その意味では「全くの現場無視」ではないから、大川さんより当たるのだろうが、それにしても経済と称しながらも計算機の箸にも棒にもかからないのは、ちょっと異常である。要するに思念の産物なのだ。

マルクス以降、ケインズとかリカードとかクズネッツとか、最近ではサミュエルソンとかスティグリッツとか、著名な経済学者は幾人も居て、マルクス以外は全員現場重視の経済学者であり従って数字重視であるが、その予言は特にマクロ経済については、せいぜい局面が合った時にしか当たっていない。マクロ経済は多分に「気」であり、多少なりとも思想が入る分だけ数値化になじまないため、強引な理想化・思想化がなされているからだ。そして思想の勉強法は、理数系の公式学習よりは遥かに哲学や神学等の学習法、つまり古典名著の多読精読による個々独立の概念理解に近いのである。

概念理解に於いて、概念同志には一定の連関はあるものの、それらの種類も内容も、また連関の仕方も徹底して個別的で、「法則」「公式」などはおおよそなく、効率的な学習とか習熟効果とかとは、おおよそかけ離れている。いきおい叙述も、公式の提示でなく著名な学者の名前の列挙になり、一見「偉いさんに胡麻を磨っているのか、あるいは虎の威を借りて権威づけしているのか」との錯覚を受けるほどだ。典型的な人文科学であり、全体を通しての共通項よりも、細かい差異の個別理解が重要視される。その意味では極めて人力であり、原始的ある。

だが逆にこの哲学、あるいは古典の学から最近の金融工学を見ると、これは逆に、「数値で表現できる部分だけ解析している狭い分野」あるいは「人の性向等も強引に

数値化してしまう、典型的な数値信仰の誤謬であり、現に当たっていないし当たる訳もない」、更には「学問の香り皆無の単なる現場の品の無いテクニク」と評価されることになる。本当はマルクス経済学の、細部はともかく骨太の部分だけでも、数値化とまでは言わなくても何らかのシステム化ができれば、学習効率も高くなるし、現場の金融工学との接点もあるいは出てくるかもしれないとも思うのだが、そういう試みは残念ながらいまだに成功していない。人類の知的財産の現状と将来の展望をライフワークの一つであると思い込んでいる私にとっては、痛恨の極みである。

ところが最近、その意味では面白い研究を聞くに至った。フランス人の新進気鋭の経済学者のピケティによる一連の研究である。ピケティは数学系の経済学者で、その意味では数学者でありながらノーベル経済学賞を受賞したナッシュ教授の系譜と言えるが、背景となる時代が大きく違っていて、ピケティの場合は一言で言うと、理論経済学版のビッグデータ解析なのだ。スパコン（スーパーコンピュータ）をフルに回して、過去250年の間に積み重ねられたあらゆる経済指標を解析にかけ、その結果を思念の予断なく読み解くと言うのが彼の研究スタイルである。そして彼が読みだした大きな経済傾向とは、「自由主義経済は自動的に貧富の差を拡大させる」と言うものだった。理由は、「資本配分の速さが経済進歩の速さを上回ることによる」からだそうである。

この結果はマルクスの「資本家は自分で自分の首を絞めて、資本主義の棺桶にくぎを打つ」の部分がある程度正当化してはいるが、あくまでも部分である上に、厳密には単に「今まではそうだった」と言うだけの話である。また他方で米国人の、「自由主義は無謬でかつ最善である」と言う信仰に「素朴すぎる」と水を指しているが、これも米国人とはひと味違うアニミズムの我々にとっては、「やっぱり」と言う感じだ。

ピケティの成果は、「数字になるものだけを解析している」という意味では依然として狭義の近代経済学に属するが、ビッグデータ解析の結果としてどういう教訓をくみ取るかは、これは「公式があって自動的に」と言う訳には行かなくて、やはり気付きと瞑想と、それに特徴をうまく切り出す切り口の工夫が要るという意味で、極めて智恵依存、つまり思念の成果でもある。

この辺は最近の気象予測と似ている。昔は理論予測だったので、天気は当たらなかった。ちょっとした低気圧が結構な雨を降らすところ、そんな小さな低気圧の出現、しかもことさらな非平衡の形成など、理論など無くて当てられる訳がないのだ。で、最近のスパコンによる数値予測、お陰でかなり当たるようになったし、裏にあるデータの数も膨大であるが、だがこれら数値解析結果の集計として、「何か新たな理論が生み出されたか」と言えば、可能性はもちろんあるものの、残念ながら少なくともまだである。

瞑想録（その3）

ピケティの成果も、経済解析の新手法の提案としては価値があるが、何らかの新たな学問分野を形成できる所にはまだ至っていない。もしできればそれは、それ自体が新発見手法として新たな地平を切り開くだけでなく、数理科学に見られるような素朴な数式信仰、例えば「全ての素粒子は式で陽に記述される」とか「粒子の生成消滅はエルミート演算子で記述されるきれい事である」と言った無言の前提にも風穴を開けられるのだ。将来は数値解析もやり放しではなくて、それを「自然の素朴な姿」として、それらを基に何らかの思想を形成する方向に向かうだろう。思念とビッグデータの統一である。

ビッグデータと従来の思念の良い所を組み合わせた、新思念による新哲学の発見、これをこそ私は近未来に望みたい。そしてその学問分野が、蓋然的にでも良いから「新たなシステム化・思想化」に至るならば、これは人類が獲得できる知見の飛躍的向上になるだろう。

（本論は以上です）